



編集発行
 群馬大学医学部同窓会
 発行責任者 白倉 賢二
 編集責任者 大山 良雄
 〒371-8511
 前橋市昭和町三丁目39-22
 電話027-220-7861(ダイヤルイン)
 FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ <http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/> 同窓会事務局メールアドレス tojoclub@ml.gunma-u.ac.jp

第61回東医体



バスケットボール部



水泳部



硬式テニス部

目次

同窓会長就任あいさつ
 医学部同窓会・刀城クラブ会長 白倉 賢二…… 2
 教授の会、同窓会総会挨拶及び会員の皆様への御礼
 医学部同窓会・刀城クラブ前会長 飯野 佑一… 3
 平成30年度同窓会総会報告
 同窓会長(前幹事長) 白倉 賢二 …… 4~5
 地域医療貢献賞受賞おめでとうございます… 6~9
 母校に望む⑥
 群馬県立小児医療センター院長
 外松 学…………… 10
 水芭蕉⑥
 日本医科大学医学部生化学・分子生物学
 大石由美子…………… 11
 地域医療研究・教育センターだより①
 地域医療研究・教育センター長 村上 正巳… 12
 第61回東医体夏季競技報告…………… 13~14
 コロンビア・サバナ大学交換留学報告…………… 15~18

訪問インタビュー
 奈良県立医科大学 放射線腫瘍医学講座
 長谷川正俊先生を訪ねて…………… 19~23
 学会報告
 応用画像医学講座(寄付講座)・校医学科
 特任准教授 宮崎 将也…………… 23
 支部だより…………… 24~27
 刀城クラブ東京支部
 第12回総会・講演会・懇親会開催のご案内…… 27
 クラス会だより…………… 28~30
 【寄稿】
 国立国際医療研究センター狩野繁之部長
 タイ王立マヒドン大学名誉博士号受賞
 群馬大学顧問・名誉教授 鈴木 守…………… 31
 財団のページ…………… 32~33
 役員会だより…………… 34
 学内人事・学外人事…………… 34
 謹告…………… 34
 編集後記…………… 34

同窓会長就任あいさつ

新時代の同窓会の役割

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ
会長 白倉 賢二 (昭50卒)



平成30年10月の総会において伝統ある群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ会長にご推挙頂き、身に余る光栄と存じております。

私は昭和50年に群馬大学医学部を卒業し、当時の大根田恒雄先生が主宰された整形外科教室に入局し、第2代教授の宇田川英一先生のご指導を受けました。県内の桐生、藤岡、富岡、館林、伊勢崎などの病院に勤務し、整形外科医としての研鑽を積みました。昭和60年より群馬大学医学部整形外科講座の教員になり、准教授を経て平成14年に創立されたリハビリテーション医学分野に転出し、教授に就任いたしました。平成27年に無事定年を迎え、現在は前橋市内の群馬県済生会前橋病院リハビリテーション科に医師として勤務しております。

来年平成31(2019)年4月で昭和44(1969)年に入学以来、満50年を迎えます。この間、海外出張と遠隔地勤務で一時期前橋を離れた以外は、前橋に住住し群馬大学医学部とともに歩んでまいりました。大学教員時代は本邦でも数少ないリハビリテーション医学教室を立ち上げ、群馬大学におけるリハビリテーション医療、教育、研究の基礎を築き、更なる発展を同窓の後輩に託すことが出来たことを誇りに思っております。

刀城クラブは昭和27年に設立され、今年で創立66年目を迎えます。私が入学した当時の群馬大学医学部は旧帝大6大学、国立旧6大学に対して、群馬大学は新8などと言われ、その後、昭和40年代後半には新設医大が次々と設立された時代でした。同窓会の皆さま、そして他大学から赴任された先生方の努力で、先発の大学に対抗するようにして群馬大学医学部は大きな発展を遂げて参りました。

私は飯野佑一前会長の下で同窓会幹事長を6年間勤めました。その間に会員の皆様からたくさんのご意見が寄せられるのを拝見して参りました。その多くが大学病院に対する励ましや、お叱りでありました。同窓会員の群馬大学に対する思い入れの強さを

感じさせると共に、同窓会員は大学に対する要望を同窓会に託していることを示めてしております。

刀城クラブ会則に、会の目的は会員相互の親睦と研修を図ること、群馬大学医学部の発展に寄与すること、学術研究の向上に貢献することとされております。刀城クラブは定例の年間行事、そして同窓会報を通じ、また全国に設置された同窓会支部活動などにより、会員間の親睦を深めてまいりました。私自身も同窓会を通じて、多くの先輩や後輩の先生方にお近づきになる機会を得ることが出来ました。同窓会は会員の親睦を図る活動を十分に果たしておりますが、同窓会行事への参加者は年々減少傾向にあり、同窓会は会員の連携を深める更なる活動が必要になっております。

平成16年の国立大学法人化に始まり、現在の大学を取り巻く環境は大きく変化しております。それまでの国立大学は国の指導のもとに運営がなされ、数々の規制の下に運用がなされて参りました。独法化で大学の自由度が増した反面、自助努力が求められるようになりました。国からの交付金は年々減らされ、外部資金の獲得が各々の大学、教員に求められ、その実績が大学の評価にも繋がるとされるようになりました。群馬大学基金が設立され、今までは各学部、教室や部署に向けられた外部資金は大学がまとめて管理するようになりました。また、大学間の統合なども水面下で進んでおり、国立大学の統廃合を含めた再編成も噂されております。

そのような社会情勢の中で群馬大学でも理工、教育、社情、医学4学部合同、医学部保健学科紫水クラブを含めた5つの同窓会が連合し、全学同窓会を結成することがすでに決定されております。これは全国の国立大学に共通した流れであり、大学側は、同窓会に対して大学と社会の接点としての役割を期待しております。

来年度は年号が変わり、アジア、EU、そしてアメリカを中心とした世界情勢とともに、日本を取り巻く環境にも変化が予想されます。刀城クラブは、会員相互の親睦を深めるだけでなく、海外協力を含め医学の発展、大学の発展に寄与する活動を高めることが求められております。刀城クラブはさらに基盤を強化し、大学の自治を守り、支援していく活動を強め、群馬大学に対する卒業生の思いを反映させていく力を持って行きたいと考えます。会員の皆様のご支援、ご協力を賜ようお願い申し上げます。

教授の会、同窓会総会挨拶 及び役員、会員の皆様への御礼

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ
前会長 飯野 佑一(昭46卒)



I. 教授の会

本日はお忙しい中、教授の会に多数お集まりくださいましてありがとうございます。皆様方には常日頃より何かとお力添えをいただきまして厚く御礼申し上げます。現在、全国支部長・支部代表者会議と交互に2年に一度同窓会総会に合わせて開催されております。本日参加されました皆様方から順次、自己紹介、近況、同窓会へのご意見やアドバイス、医学部及び附属病院に対する要望、提言何でも結構ですからどうぞ忌憚のないご意見を述べていただきたいと思っております。本年、群馬大学全体の同窓会である群馬大学同窓会連合会が正式に発足いたしました。初代会長には工業会顧問、前工業会理事長の金子氏が推薦され承認されました。群馬大学同窓会連合会の誕生により、群馬大学への意見や要望を反映させる窓口ができたわけであります。どうぞよろしくお願いいたします。

2012年10月に森川前会長の後任として同窓会・刀城クラブ会長に就任いたしました。以来3期6年勤めてまいりましたが、本日を持って会長の任期が終了いたします。永年にわたる皆様方のご支援ご鞭撻に心より御礼申し上げます。

II. 平成30年度同窓会総会

本日はお忙しい中同窓会総会に多数お集まりくださいましてありがとうございます。会員の皆様には同窓会運営に何かとご支援ご鞭撻を頂き心より御礼申し上げます。お蔭様で同窓会の一般的な年間行事は恙無く行われております。いくつかの問題点につきましては引き続きご協力をお願いいたします。

第一は3年に一度改訂している会員名簿についてです。本年が名簿改訂の年です。大山委員長を中心とした名簿作成委員会が頑張っております。空欄のない名簿作成にご協力をお願いいたします。

第二は群馬大学全学同窓会発足の件です。本年4月、全学同窓会が正式に発足し、群馬大学同窓会連合会と命名されました。群馬大学に対しても、意見や要望を反映させる機会が身近になったわけです。

第三は群大病院医療事故のその後ですが、特定機能病院承認取り消しに対して承認再申請中であり、明るい兆しが見えてきたようです。群大病院の努力が認められることを願っています。会員の皆様にな

お一層のご協力をお願いいたします。

2012年10月森川前会長の後任として同窓会・刀城クラブ会長に就任以来3期6年間勤めてまいりましたが、本日を持って会長の任期が終了することとなりました。永年にわたる皆様方のご厚情、お力添えに心より御礼申し上げます。後任の白倉新会長と一丸となって同窓会を盛りあげていただきたいと思います。

III. 懇親会

皆さん今晚は。本日はお忙しい中教授の会及び平成30年度同窓会総会に長時間にわたりご出席くださいましてありがとうございます。お蔭様で無事終了いたしました。この懇親会では会員相互の親睦を深め、楽しい会にさせていただきたいと思っております。会員の皆様、会長任期中の6年間ご支援、ご鞭撻本当にありがとうございました。

IV. 役員、会員の皆様へ

私が同窓会・刀城クラブ会長に就任したのが、2012年10月でした。同窓会運営になれつつあった2年後の2014年11月14日に群大病院において腹腔鏡下肝切除術で8名が死亡するというニュースが報道され、大きなショックを受けました。すぐさま何人かの先輩方、同窓会役員の方々に相談し、同窓会としてやるべきことを模索しましたが十分なことができませんでした。ただ、会報を通して医療事故に関する正確な情報を会員の皆様に伝えよう、この難局を乗り切るために同窓会の頑張っている姿を伝えようと努力してまいりました。県内外の支部総会に参加させていただき、医療事故に関する講演あるいは意見交換など10回は行いました。その中で、会員の皆様がいかに肩身の狭い思いをされておられるか、いかに憤りを覚えておられるか、そしていかに心を痛めてこられたか心に深く刻まれました。いろいろな質問を受け、さまざまなお意見をお聞きし、ときには励まされ、時には厳しいお叱りを受けることもありました。多くの会員の皆様と直接意見を交わす中で皆様が母校の一日も早い信頼回復を如何に強く望んでおられるか、皆様方の強い母校愛を肌で感じました。

最近では、群大病院がいろいろな面で改善に向け、たゆまぬ努力を続けていることが新聞報道されています。再申請中の特定機能病院承認も期待されます。

私自身、時には感情に押し流されそうになったこともありました。それでも感情を抑え、何とか冷静さを保つことができたのは役員の皆様、会員の皆様方の暖かいお力添えがあったからこそであります。母校を思う多くの仲間と接触できたからであります。6年間支えてくださった役員の皆様、会員の皆様本当にありがとうございました。

平成30年度 同窓会総会報告

同窓会長（前幹事長）

白倉 賢二（昭50卒）



平成30年度同窓会総会が10月20日（土）刀城会館にて開催されました。議長団は眼科学講座眼科学分野が担当し、議長に戸所大輔氏（平9卒）、書記に馬郡幹也氏（平20卒）が選出され、議事を進めていただきました。

総会は議事次第にのっとり、この1年間に逝去した会員に黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りいたしました。次いで、飯野会長から御挨拶がありました。

続いて、議長の司会により報告事項と議事の審議が行われ、原案どおりすべての議案が承認されました。以下、各議事について概説いたします。

第1号議案：平成29年度事業報告（29.7.1～30.6.30）について

1. 会員状況 正会員6,047人、名誉会員12人、特別会員68人、準会員4人 計6,131人。
2. 支部の異動 平成29年度異動なし。
3. 事業

1) 北関東医学会の共催

第64回北関東医学会総会が平成29年9月21日、22日に刀城会館において開催され、同窓会推薦講演は、清水公裕氏により行われました。

2) 同窓会会報の発行

刀城クラブ会報は第247号、248号、249号、250号が刊行されました。

3) 学友会並びに医学部等への援助

運動部・文化部に対しての援助並びに交換留学生との交流会援助、学会補助等の財政的援助を例年どおり行いました。

4) 定年退任教授の記念送別会

平成30年3月1日に依藤 宏教授、和泉孝志教授、桑野博行教授、土橋邦生教授の退任記念送別会が刀城会館で開催され、多数の参加者がありました。

5) 卒業時表彰の実施

平成30年3月23日卒業謝恩会で卒業生5人に表彰状と記念品を贈呈しました。

6) 卒業生への記念品贈呈

卒業生全員にネクタイピン（男性）、バッジ（女性）を贈呈しました。

7) 新入生との懇談会

平成30年4月7日刀城会館において新入生・学士編入生歓迎オリエンテーションが開催され、役員と若い先生方と新入生の間で同窓会の紹介や質疑応答が活発に行われ親睦が深められました。

8) 医学部代表者との懇談会

9) 医学部新任教授との懇談会

平成30年2月1日（木）附属病院内イタリアンレストラン・チネマにおいて、平塚学長、石崎医学部長、田村病院長、松崎教務部会長・同窓会副会長、同窓会からは飯野会長以下役員7名、新任教授は小松先生、浦岡先生、岩瀬先生の3名が出席し、それぞれの立場から意見交換がなされ、有意義な懇談会が行



同窓会総会

われました。

10) 奨学補助金の実施(交換学生並びに学術集会)
医学部の交換学生旅費、学術集会に対して例年どおり補助を行いました。

11) 公益財団法人群馬健康医学振興会活動への協力
鈴木理事長から理事会・評議員会および役員について報告がありました。また、平成29年度賛助会員、平成29年度の実施事業について報告がありました。

12) その他

役員会(役員会11回、委員会31回)について、白倉幹事長から平成29年度事業報告の説明があり、異議なく承認されました。

第2号議案:平成29年度会計決算および同監査報告について

梅枝副会長(財務委員長)から平成29年度一般会計収支決算と平成29年度同窓会基金積立収支決算の説明があり、鈴木会計監査の監査報告の後、異議なく承認されました。

第3号議案:平成30年度事業計画について

白倉幹事長から事業計画について提案があり、異議なく承認されました。

第4号議案:平成30年度予算案について

梅枝副会長(財務委員長)から平成30年度一般会計収支予算案について提案があり、異議なく承認されました。

第5号議案:役員の改選について

西松副会長(総務委員長)から次期会長に、7月26日の役員会において、白倉賢二先生が選任された件について提案があり、異議なく承認されました。

その他として、西松副会長から平成29年度地域医療貢献賞の選考についての説明と受賞者の紹介があり、飯野会長より表彰状と記念品が贈呈されました。

被表彰者 杉田安生先生、石黒早苗先生
野口忠男先生、宮下興先生
岡林弘毅先生、栗林俊夫先生
中嶋宏治先生、根本博文先生

1年間の物故会員(卒年順)平成29年7月1日~平成30年6月30日

正 会 員

後藤 忠夫 先生(昭23卒)	五味 洵 先生(昭29卒)	熊谷 紀元 先生(昭41卒)
渋谷 敏三 先生(昭23卒)	阿久沢 利雄 先生(昭30卒)	相良 淳史 先生(昭41卒)
早川 勇 先生(昭23卒)	川邊 宗次郎 先生(昭30卒)	佐藤 俣也 先生(昭41卒)
春田 孝正 先生(昭23卒)	豊田 守國 先生(昭30卒)	武信 満喜夫 先生(昭41卒)
日向野 晃一 先生(昭23卒)	渡 仲三 先生(昭30卒)	富所 隆三 先生(昭41卒)
八尾 十三 先生(昭23卒)	石橋 英男 先生(昭32卒)	藤倉 隆 先生(昭41卒)
山口 晋吾 先生(昭23卒)	田代 矩彦 先生(昭32卒)	内田 信一 先生(昭42卒)
稲葉 昭実 先生(昭24卒)	飯島 耕作 先生(昭33卒)	鈴木 忠 先生(昭42卒)
染谷 守 先生(昭24卒)	大山 泰雄 先生(昭33卒)	黛 卓爾 先生(昭42卒)
中村 陽一 先生(昭24卒)	片貝 重之 先生(昭33卒)	鈴木 喜久夫 先生(昭43卒)
安田 一郎 先生(昭24卒)	松岡 正紀 先生(昭33卒)	田中 壮 先生(昭44卒)
上原 元 先生(昭25卒)	松本 淳 先生(昭33卒)	柴崎 尚 先生(昭45卒)
亀井 俊郎 先生(昭25卒)	塩崎 秀郎 先生(昭34卒)	大谷 英祥 先生(昭48卒)
北島 光二 先生(昭25卒)	田村 璋夫 先生(昭34卒)	安立 泰宏 先生(昭51卒)
齊藤 憲一 先生(昭25卒)	中村 善寿 先生(昭34卒)	山下 直宏 先生(昭54卒)
田辺 武巳 先生(昭25卒)	設楽 稔 先生(昭35卒)	芳賀 照行 先生(昭56卒)
早川 真一 先生(昭25卒)	原 富夫 先生(昭35卒)	稲葉 繁樹 先生(昭57卒)
吉津 暁 先生(昭26卒)	松峯 敬夫 先生(昭35卒)	山洞 善恒 先生(昭61卒)
田島 幸男 先生(昭26卒)	宮原 康員 先生(昭35卒)	富澤 由雄 先生(平5卒)
星野 富美子 先生(昭26卒)	栗原 寛 先生(昭36卒)	見城 瑞季 先生(平28卒)
笠島 欣一 先生(昭27卒)	鈴木 素司 先生(昭36卒)	
間坂 宏 先生(昭28卒)	川崎 恒雄 先生(昭39卒)	特別会員
横山 繁 先生(昭28卒)	佐藤 哲雄 先生(昭40卒)	松山 研二 先生
大澤 雄二郎 先生(昭29卒)	三村 清 先生(昭40卒)	高山 武 先生

地域医療貢献賞受賞おめでとうございます



後列左より：根本博文先生、中嶋宏治先生、栗林俊夫先生、岡林弘毅先生、飯野前会長
前列左より：宮下興先生、野口忠男先生、石黒早苗先生、杉田安生先生

杉田 安生先生 (昭40卒)

【学 歴】

昭和40年3月 群馬大学医学部卒業
昭和40年4月 群馬大学医学部大学院入学
昭和45年3月 群馬大学医学部大学院卒業

【職 歴】

昭和41年3月 群馬大学医学部第一内科 入局
昭和41年3月～昭和45年3月

群馬大学医学部第一内科、原町赤十字病院、
利根中央病院等にて研修

昭和46年4月～昭和48年4月

桐生厚生病院、総合太田病院に勤務

昭和48年4月 杉田内科医院を開業

【役職等】

昭和49年より現在 太田市立烏之郷小学校学校医
昭和62年～昭和63年 太田市医師会理事
平成9年3月～平成23年5月 太田市医師会副議長
平成24年3月～平成26年2月 太田市医師会議長
平成20年3月～平成28年4月 太田市生活保護法施行事務嘱託医

【推薦理由】

昭和48年、群馬県太田市に開業以来、地域医療の充実に専念し、昭和49年より地元小学校の校医となり、更に20年以上にわたり生活保護法施行事務嘱託

医を勤め、この間、太田市医師会理事・副議長・議長の要職を担った。太田内科医会会長として、地元内科医のリーダーとしても活躍し、更に地元刀城クラブの支部長として、同窓会刀城クラブの発展に寄与し、推薦する。(太田・館林・邑楽支部長 小島章、昭43卒)

石黒 早苗先生 (昭41卒)

【学 歴】

昭和41年3月 群馬大学医学部卒業

【職 歴】

昭和43年4月 群馬大学医学部精神神経科勤務
昭和46年4月 榛名荘病院勤務
昭和48年4月 福音診療所開設
昭和54年4月 南福音診療所開設
昭和62年4月 NPO法人『燈台』アフガン難民救
援協力会設立 アフガニスタンへの医療と教育支
援を30年間継続し、現在も理事長として活躍中。
平成7年4月 埼玉精神神経科診療所協会入会、「埼
玉いのちの電話」後援会理事として自殺予防に尽
力されている。埼玉県立がんセンター非常勤医師
として「WHO癌疼痛治療暫定治療指針」策定の
研究院の一人として参加し、終末期がん患者の精
神科診療に携わる。看護師の教育指導を20年間行

い、埼玉県におけるサイコオンコロジー活動の価値を全国的に高めた。

平成30年3月 埼玉県北本市立南小学校学校医
群馬県「新生会」後援会幹事。

【推薦理由】

「石黒早苗」先生は、埼玉県北本市に福音診療所を開設し、精神科医・内科医として44年間地域医療に多大な貢献をされました。同時に、国際貢献としてNPO法人『燈台』アフガン難民救援協力会を設立し、現地の医療と教育支援を30年間継続されてこられました。その間、大規模な空襲、タリバンの暗躍、治安の悪化など様々な苦難を乗り越え、先生の信仰するキリスト教精神による「愛の実践」に基づき、現在も尽力されておられます。その支援の証しである、設立された「ヌール難民学校」は、これまで多くの優秀な卒業生を輩出し、国づくりに大いに貢献しています。

その他、末期がん患者の精神科診療、看護教育、「いのちの電話」による自殺予防など幅広い分野にわたり、現在も現役で活躍されておられます。

地域貢献賞にふさわしい先生と思われ推薦いたします。(埼玉支部長 星野 修一、昭52卒)

野口 忠男先生 (昭41卒)

【学 歴】

昭和41年3月 群馬大学医学部卒業

【職 歴】

昭和41年4月 群大病院でインターン
昭和42年4月 群大産婦人科学教室 入局
昭和47年4月 群大産婦人科学教室 助手
昭和49年4月 自治医科大学産婦人科学教室 講師
昭和53年11月 宇都宮市にて開業
昭和57年4月 産婦人科医会 性教育委員会委員
平成10年4月～平成16年3月 日本産婦人科医会
栃木県支部総務
平成16年4月～平成21年3月
日本産婦人科医会 栃木県支部長、結核・感染症
サーベイランス委員、栃木県母子保健部会委員、
学校保健部会委員、栃木県保健衛生事業団理事、
母体保護法審査委員長、日本産婦人科医会理事
平成27年4月～ 宇都宮大学・校医

【推薦理由】

1. 自治医科大学創立にあたり、松本清一教授と共に講師として赴任、産婦人科教室の創設に尽力した。
2. 宇都宮市に開業後、産婦人科医会役員となり、県及び市町村教育委員会に性教育の重要性を説き、カリキュラムの作成、保健体育、養護担当教

員の指導などに努めた。

3. 宇都宮市の子宮がん・乳がん検診実施に際し、産婦人科医会栃木県支部長として参画し検診システム構築、実施指導などに協力した。

以上、地域の健康教育・医療行政に寄与すること大きく、表彰に値するものと考えます。(栃木支部長 益田 澄夫、昭32卒)

宮下 興先生 (昭41卒)

【学 歴】

昭和41年3月 群馬大学医学部卒業

【職 歴】

昭和42年4月 群馬大学医学部麻酔学教室入局
昭和43年4月 群馬大学医学部助手
昭和45年6月 済生会宇都宮病院麻酔科医長
昭和46年6月 群馬大学医学部助手
昭和48年6月 群馬県立がんセンター麻酔科医長
昭和51年6月 前橋赤十字病院麻酔科部長
昭和53年10月 自治医科大学麻酔学教室助教授
平成2年10月 上毛泌尿器科善衆会病院副院長
平成7年5月～平成17年5月
社会保険診療報酬請求審査委員(麻酔・ペインクリニック分野)

平成11年5月 医療法人高崎ペインクリニック院長
～現在

平成15年7月 社会福祉法人高崎福祉倶楽部理事長
～現在

【資 格】

昭和43年1月 医師免許
昭和48年9月 麻酔科標榜医
昭和49年12月 麻酔指導医
昭和50年6月 医学博士
平成4年4月 日本ペインクリニック学会認定医
平成17年6月 日本頭痛学会専門医

【推薦理由】

1. 社会福祉法人高崎福祉倶楽部理事長として、社会福祉に貢献してきた。
2. 医療法人高崎ペインクリニック院長として18年間活躍している。
3. 社会保険診療報酬請求審査委員として麻酔・ペインクリニック分野の審査に長年従事してきた。
地域医療貢献賞にふさわしい先生と思い推薦いたします。(同窓会役員・群馬大学名誉教授 後藤 文夫 昭42卒)

岡林 弘毅先生 (昭44卒)

【学 歴】

昭和44年3月 群馬大学医学部 卒業

【職 歴】

昭和44年4月 高知県立中央病院研修医
 昭和47年4月 高知県立中央病院外科副医長
 昭和49年9月 岡山大学医学部第一外科副手
 昭和53年7月 高知県立宿毛病院外科医長
 昭和54年3月 医療法人弘人会岡林病院副院長
 平成2年4月 社団法人高知市医師会理事
 平成5年4月 県庁前クリニック院長(現在に至る)
 平成12年4月 社団法人高知市医師会理事
 平成20年4月 社団法人高知市医師会会長兼社団法人高知県医師会副会長
 平成24年4月 社団法人高知県医師会会長(現在に至る)(平成26年6月～平成28年6月公益財団法人日本医師会理事)

【推薦理由】

岡林氏は、昭和44年3月に群馬大学医学部を卒業し、故郷である高知県に帰郷、当地で研修を行った。その後、岡山大学医学部第一外科学教室ならびに関連する病院において研鑽を積み、昭和53年に岡山大学から学位記を授与された。昭和54年から医療法人弘仁会岡林病院副院長として勤務し、平成5年に県庁前クリニックを開業した。この間、高知市医師会理事、副会長、会長として高知市の医療・福祉に多大な貢献をし、さらに平成24年には社団法人高知県医師会会長に就任し、また在任中には公益社団法人日本医師会理事(平成26年6月～同28年6月)として高知県のみならず中央の医師会活動に参加して活躍した。その功績により日本医師会最高優功賞を受賞している。また、高知県医師国民健康保険組合理事、理事長、さらには高知県国民健康保険団体連合会理事、一般社団法人全国医師国民健康保険組合連合会理事、公益財団法人高知県総合保険協会理事長を現在までその任務を継続し、さらに公益財団法人エコサイクル高知理事、社会保険診療報酬支払基金高知支部幹事を務めた。

岡林氏は多くの団体のトップとして活躍し、地域のみならず日本国民のために多くの事業の責任者として活躍してきたが、特筆すべきは、策定された日本一の健康長寿構想を実現させるための高知県総合保険協会を中心に予防可能ながん対策の実行と特定検診・がん検診受診率向上の加速化、県内遠隔地・過疎地の健康診断を促進し、ニーズにあった質の高い保健サービスの推進、提供に多大な尽力を払った。氏のこれまでの業績と活躍は群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ表彰・補助金制度規定第16条の「地

域の医療機関に永年従事し、その分野で功労のあった者」にまさに合致するものである。さらにはその業績は高知県全体のみならず本邦の保険診療にも大きく寄与したものと考えられる。以上を考慮して、氏の活躍は群馬大学医学部同窓会地域医療貢献賞に値するものとしてここに推薦する。(藤岡多野医師会 田村 勝、昭44卒・伊勢崎市医師会 本多 隆一、昭44卒〈クラス会幹事〉)

栗林 俊夫先生 (昭45卒)

【学 歴】

昭和45年3月 群馬大学医学部卒業

【職 歴】

平成2年 前橋市で小児科医院開業
 平成4年～平成11年 前橋市立中川小学校校医
 平成12年4月 前橋市医師会理事
 平成15年10月 前橋市医師会理事退任
 平成23年4月 前橋市医師会監事
 平成30年6月 前橋市医師会監事退任
 平成28年4月 通所リハビリセンターへいわ町医院に併設開業

【推薦理由】

栗林先生は、小児科専門医として地域の小児検診、予防接種に積極的に関わり委員会活動の中心となり活動して参りました。医師会理事就任中に事故で頸椎損傷を負い、一時は頸から下は完全に麻痺するという重症でありながら、手術、リハビリを経て、小児医療に対する知識と情熱は、ますます向上し四ヶ月後には診療を再開しました。リハビリの重要性を痛感し、小児科診療所にリハビリセンターを併設し、自らの体験をアドバイスして要介護から自立へのリハビリを提供しています。歩行に不自由を感じながら医師会監事として復帰し活躍する姿は、周りに勇気と自信を与えています。(前橋支部長 山田 邦子、昭44卒)

中嶋 宏治先生 (昭46卒)

【学 歴】

昭和46年3月 群馬大学医学部卒業
 昭和46年4月 群馬大学医学部附属病院第二外科入局

【職 歴】

昭和56年1月 中嶋医院開業

【役職等】

昭和58年4月～平成29年3月 校医、前橋市立天神小学校
 昭和60年4月～現在 桃瀬幼稚園

平成4年4月 前橋市医師会理事(至平成11年3月)救急医療、夜間急病診療所、労災、自賠責、保険診療、看護学校、医業対策(特に前橋赤十字病院救命救急センターの開設に尽力する)

平成5年6月～ 社会保険診療報酬支払基金審査委員会委員、現在は主任審査員

平成11年10月～平成15年3月 前橋市介護認定審査会委員

平成30年6月 前橋市医師会監事

【推薦理由】

中嶋宏治先生は、昭和56年1月、中嶋医院を開設。以後、地域医療に尽力される中、平成4年4月前橋市医師会理事に迎えられ前橋市の救急医療体制の整備、夜間急病診療所の発展、看護教育の充実に力を注がれた。又、在宅医療の拠点である有床診療所(在宅療養支援診療所)及び介護老人保健施設を共に運営され、地域在宅医療の中心的役割を担っている。開設以来、救急告示診療所の指定を受け、救急医療実践に努めておられる。地区の幼稚園医、小学校医も30余年勤めている。現在、尚、積極的に地域医療活動に邁進しておられる中嶋宏治先生を貢献賞に値する者として推薦いたします。(前橋支部顧問 大竹 誼長 昭36卒)

根本 博文先生 (昭48卒)

【学 歴】

昭和48年3月 群馬大学医学部卒業

昭和60年 学位授与(東京女子医科大学小児科学教室)

【職 歴】

昭和48年4月 群馬大学医学部小児科入局

昭和49年4月 獨協医科大学小児科助手

昭和52年4月 群馬大学医学部小児科非常勤

昭和53年11月 ピッツバーグ大学共同研究員

昭和55年11月 東京女子医科大学第二病院小児科助手

昭和63年11月 東京都北区滝野川にて小児科医院を開設(現在に至る)

【医師会活動等】

東京都医師会 健康スポーツ医委員会委員

北区医師会理事、学術委員会委員、心臓検診委員会委員、スポーツ医委員会委員等を歴任

学校医等 北区立紅葉中学校校医、北区立滝野川保育園園医、同北保育園園医、同西保育園園医、その他6か所の私立保育園園医

【推薦理由】

根本博文先生は、昭和49年に黒梅恭芳先生(昭28卒)が獨協医科大学小児科学教授に就任されたのに併せて同教室の助手で赴任しました。昭和52年には黒梅先生が群馬大学医学部小児科教授になられ、それに従い群馬大学医学部小児科の医局に戻りました。米国留学から帰国後は東京女子医科大学第二病院小児科の助手として勤められました。そして、昭和63年11月に北区滝野川に小児科医院を開設されました。開院当初は、近隣に小児科医院がなく、区立中学校の校医をはじめ多くの保育園、幼稚園の園医を務め、現在も区立滝野川保育園の園医等を務めています。更に北区医師会においては各委員会の委員として活躍中で、長年にわたり地域医療に貢献しております。(東京支部長 堀 貞夫、昭47卒)



母校に望む ⑥7

小児がん治療の進歩のかげで
…長期フォローアップの必要性…

群馬県立小児医療センター

院長 外松 学 (昭56卒)



私は昭和56年に群馬大学を卒業後、直ちに、群小小児科に入局いたしました。群大病院にて1年間、小児科の基礎的な知識と小児科必須の基本的な手技を習得後、県内の関連病院小児科で小児科診療の研鑽に努めました。昭和60年からは群大病院に戻り、小児血液・腫瘍グループに所属し、今日まで小児がん（白血病、小児固形腫瘍等）の診療に携わってきました。当時の小児がんの予後は現在に比べるとかなり不良でした。その当時、急性リンパ性白血病は最も予後良好な小児がんでしたが、それでも治癒するのは約50%くらいでした。急性骨髄性白血病は40%以下、慢性骨髄性白血病は根治に導く有効な治療は存在しませんでした。ここ20～30年での小児がん治療の進歩がめざましく、最近のデータでは、急性リンパ性白血病は約80%、急性骨髄性白血病は約60%が治癒するようになり、慢性骨髄性白血病においては分子標的薬の開発により多くの症例で病勢をコントロールできるようになり、一部の症例では治癒が期待できるようになりました。小児がんの治療分野におけるこれら多くの進歩を経験できたことは、小児がんを専門してきたものにとっては大きな喜びでした。一方、多くの小児がん患者が助かるようになって、別の大きな問題が発生してきました。それは小児がんそのもの、或いは、その治療による晩期合併症の発症です。二次がん、薬剤性心筋症、内分泌障害（低身長、甲状腺機能障害、早期閉経、等）、不妊等の晩期合併症が、小児がんサバイバー（経験者）にさまざまな問題を引き起こしてきております。

平成18年からは現在の群馬県立小児医療センターに赴任し、小児がん患者の治療をする傍ら、当センターで治療を受けてきた小児がんサバイバーのフォローアップを開始しました。まずは重要な基本的な情報である治療歴（使用した抗がん剤の種類と総投与量、放射線治療における照射部位と総線量、手術内容、等）を過去の紙カルテから収集し、データベ-

ス化することに多くの時間を費やしました。データ収集直後の解析で、すでに数名の患者さんに晩期合併症（低身長、思春期早発、無月経、尿崩症、聴力障害、心筋障害、腎障害、等）を認めました。10～15年前は、小児がんの治療内容については本人・家族に十分な説明がされていましたが、晩期合併症についての情報提供は十分ではありませんでした。従って、データベース作成後、まずは、患者本人と家族に晩期合併症の存在と長期フォローアップの必要性を説明し、1回／年の外来受診を徹底することを指導しました。当センターにおいては治療終了後10年未満の患者さんが多いためか長期フォローアップ外来で新たに発見される晩期合併症は多くはありませんが、骨肉腫、甲状腺がん、乳がん、薬剤性心筋症、等が発見されました。

晩期合併症を早期に発見することはできるようになりましたが、次に問題になったのは、当センターには成人の診療科がないことでした。発見された晩期合併症の治療のために成人科のある他院に紹介する必要が出てきました。多くは群大病院に紹介することで解決しましたが、患者の移住地を考慮すると本当にそれでよかったのか疑問が残ります。

県内には晩期合併症の存在、長期フォローアップの重要性を知らないまま社会に出た多くの小児がんサバイバーが存在しているものと思われます。これらの情報をどのようにサバイバーに伝えていくのか大きな課題と言えます。まだ、何らかの形で治療を受けた医療機関とつながりがある患者さんには方策も考えられます。しかし、全く医療機関とつながりなくなった患者さんについてはよい方法が思い浮かびません。

最後に、晩期合併症はさまざまな臓器に発生する可能性がありますので、小児がんサバイバーがどの診療科にも受診する可能性があります。群馬大学を卒業され、さまざまな医療分野で活躍されている先生がたの協力がなければ晩期合併症を抱えた小児がんサバイバーの治療はできません。今後は、そのようなサバイバーが先生方のもとへ、突然、来院するようになる機会も増えてくるものと予想されます。その節にはよろしく願いいたします。小児がんサバイバーの晩期合併症に関わる様々な診療科の医師やその他の職種の方に長期フォローアップの重要性を啓蒙していくことも大切なことと感じております。



感謝の心

日本医科大学
生化学・分子生物学（代謝・栄養学）
教授 大石由美子（平10卒）

最近、東京医科大学が医学部医学科の一般入試で女子受験者の得点を一律に減点し、合格者数を制限していたことが判明し、明らかな女性差別であるとの批判が相次いでいます。さらに、医療の現場で求められている働き方では、女性医師が出産を経て働き続けることはきわめて困難であるという実態も明らかとなり、いま、女性医師・女子医学生が存在が、大変注目されています。

私は、平成10年に群馬大学医学部を卒業し、卒業後ちょうど20年となる今年（平成30年）4月1日付けで日本医科大学生化学・分子生物学（代謝・栄養学）教授を拝命いたしました。

日本医科大学は1876年に創設された済生学舎を前身とし、以来、140年余を経た我が国最古の私立医科大学です。これまで、1万人を超える優れた医師・医学研究者を卒業生として輩出し、千円札でお馴染みの細菌学者・野口英世博士もそのおひとりです。群馬大学医学部と同様、日本医科大学でも、平成30年度入学生の47%を女性が占め、年々増加しています。でも、日本医科大学医学部の主任教授としては、私が初の女性だそうです。そこで、教育・研究制度等の改革にも積極的に参画し、女性も今まで以上に活躍できる環境を作りたいと思います。また、女子学生や若手・女性医師の先生方との交流を通じて、医学研究の魅力を伝え、次世代を担う人材を育てていけたらこれほど嬉しいことはありません。自己紹介を兼ねて、医師・医学研究者としての私の歩みを振り返ってみたいと思います。

平成10年当時、現在のような研修制度はなく、最終学年の学生は直接、希望する医局に志願して入局先を決めていました。私は、永井良三教授（現自治医科大学・学長）率いる第二内科に入局し、医師としてのトレーニングが始まりました。研修

医として最初に受け持たせていただいたのは、自己免疫疾患に併発した心内膜炎の症例で、新井昌史先生（現館林厚生病院長）のご指導のもと、英文の症例報告も書かせていただきました。入局2年目には、国立病院機構高崎総合医療センターで、内科全般について学びました。複数の同期入局者が同じ職場で働けるのも最後の機会と、食材を仕入れ、医局で煮炊きをするなど、楽しい研修生活でした。このように思い返してみますと、私の医師としての基盤は、第二内科在籍中の2年間に、同窓会の多くの先生方のご指導のもと形作られてゆきました。

その後、日本心臓血管研究振興会附属榊原記念病院で循環器内科医としてのトレーニングを積んだのち、東京大学大学院医学系研究科博士課程に進学（指導教官：永井良三先生）、以後一貫して代謝・生活習慣病に関する研究を続けてまいりました。2009年から2013年まで、研究を開始した当初から憧れていたGlass研究室（米国カリフォルニア大学サンディエゴ校）に留学しました。5ヶ月の息子を連れ、母子のみでの留学は、確かに勇気があることでしたが、家族・友人をはじめ、多くの方々に支えられていることを心から実感することができました。

米国留学後、東京医科歯科大学難治疾患研究所で新しく教室を立ち上げる機会もいただきました。主任研究者（Principal Investigator）として独立して6年目に入りますが、教室員・同僚の先生方に支えられてここまでまいりました。今後も、内科・循環器内科医としてのバックグラウンドを活かし、生活習慣病などの加齢関連疾患の病因・病態を解明する研究を通じて、国民の健康と福祉に貢献してまいります。また、基礎医学の教授として、医学生には、将来、病態の理解に役立つ「生きた生化学」を教育し、教育理念である「他者を大切にすることと研究心を持つ質の高い医師の育成」に力を尽くしたいと思います。

医療の現場も研究室も、多くの職種が協力し、支え合って成り立っています。医師を目指す学生や若手医師の先生方には、自分がいつも周囲の方々から支えられていることを思いおこし、感謝の心を忘れないことが大切かと思えます。そうすれば、敢えて自分からアピールしなくても、どこかで誰かがあなたの頑張りを見て、必要なときにそっと手を差し伸べてくれます。私も、感謝の心と謙虚さを忘れず、日々精進してゆきたいと思えます。同窓会の先生方には、今後ともご指導を賜りますよう、どうぞよろしく願いいたします。

**地域医療研究・
教育センターだより①****地域医療研究・教育センターの
設置について**

地域医療研究・教育センター長
村上 正巳 (昭57卒)

群馬大学医学部附属病院の改革の3本柱の一つとして、平成29年11月22日に群馬県の医療ネットワークの充実と医師配置の適正化を主な目的として「地域医療研究・教育センター」が設置されました。その設置と合わせて、群馬県における医師を始めとする医療スタッフの人材交流や育成を図るとともに、地域医療ネットワークを充実させる目的で、群馬県、医師会、病院協会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、臨床検査技師会、医療機関などが参画する「ぐんま地域医療会議」が平成30年3月26日に発足しました。地域医療研究・教育センターでは、群馬県の医療の実態調査を行い、ぐんま地域医療会議に必要な情報を提供する役割を担っています。

地域医療研究・教育センターが群馬県内医師配置の適正化や医師を始めとする医療スタッフの育成に係る事業を行うことから、従来から医療人の育成に取り組んでまいりました「医療人能力開発センター」ならびに関連する部門が平成30年4月1日に地域医療研究・教育センターの部門として位置付けられることとなりました。

このような経緯で、現在の地域医療研究・教育センターは、臨床研修部門（臨床研修センター）、地域医療支援部門、スキルラボ部門、看護職キャリア支援部門、男女協働キャリア支援部門の各部門からなっています。各部門の概要について説明いたします。

臨床研修センターは大嶋清宏教授がセンター長を務められ、2年間の初期研修において本院の特徴を生かした臨床研修プログラムを提供し、その後の専門研修のサポートも行っています。平成30年度に始まりました新専門医制度に対応し、基本領域専門医やサブスペシャルティ専門医の資格取得などの生涯研修のサポートにも取り組んでいます。

地域医療支援部門は、以前から群馬大学の地域医療学生のカリキュラス支援などを行っています群馬県地域医療支援センターと上述のように群馬県の医療事情を調査・検証してぐんま地域医療会議に報

告するなど医師の適正配置など医療スタッフの人材交流を主に扱うぐんま医療人ネットワークからなります。

地域医療学生をはじめとする医学生、群馬県で活躍する医師のキャリア形成を支援する目的で、平成22年4月に群馬県の寄附部門として地域医療推進研究部門が設置されました。その後、現在の群馬県地域医療支援センターと名称を改め、卒後10年間のキャリア形成をサポートする「ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス」を作成し、平成27年度からの地域医療卒業生のキャリア形成支援を行っています。

ぐんま医療人ネットワークは、県内医療機関ならびに群馬大学の医会を対象として群馬県医師数等実態調査を実施し、その結果をぐんま地域医療会議に報告しています。さらに、平成30年8月にぐんま医療人ネットワークに、医師個人あるいは医療機関からの医師配置に関する相談を受け付ける相談窓口を設置しました。

スキルラボ部門は、平成21年4月に開設され、平成23年には第2スキルラボセンターが増設されました。平成25年には旧スキルラボセンターが現在の第1スキルラボセンターに移転・改装され、現在では、年間延べ1万人を超える利用者がいます。

男女協働キャリア支援部門は、男女問わず、充実したキャリアを目指す医療者を支援するため、2016年に女性医師等教育・支援部門から名称を変更しました。個々のニーズに合わせた再教育プログラムである医師ワークライフ支援プログラムは、現在、男性も利用可能となっています。2017年度の利用者は38名、これまで延べ108名の医師が利用しています。

看護部では、「クリニカルリーダー」「院内キャリアアップ制度」「目標管理」を3本柱とした群大看護職キャリアパスに則り、質の高いジェネラリスト育成に取り組んでいます。看護職キャリア支援部門では、クリニカルリーダーレベル別研修や、レベル取得のデータ管理、新入職者のメンタルフォローなどを行っています。

以上のような各部門の取り組みの他、地域医療研究・教育センターでは、これまで医学教育センターで行って行っていた「SES生涯研修支援事業」として、医療人のための統計セミナー、専門医共通講習など様々な取り組みを行っていますので是非ご利用ください。

皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

第61回東医体夏季競技報告

運動部会会長 小田 洋樹 (医学科4年)

平素より、東日本医科学生総合体育大会(以下東医体)運営および競技への格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。今年も東医体の夏季競技が無事終了し、様々な種目において目覚ましい成績を収めることができましたので、ご報告させていただきます。

今夏に行われた第61回東医体におきまして群馬大学は、男子バスケットボール、水泳男子個人、水泳女子個人、陸上男子4×400mRで金メダル、サッカー、男子バレー、女子バレー、女子硬式テニス団体、陸上女子400m、800m、柔道男子個人で銀メダル、陸上男子400m、走り幅跳び、男子軟式テニス団体、女子バドミントン団体、女子バドミントンシングルス、女子剣道個人、団体が銅メダルを見事に勝ち取りました。男子バスケットボール部は、昨年度に続き三連覇を達成しました。主将の須田翔平(医学科4年)は同学年の部員と力を合わせ、チームをまとめ上げ三連覇に導いてくれました。

女子水泳個人(平泳ぎ)で金メダルを獲得した須永風由子(医学科4年)は4連覇を成し遂げました。この結果は彼女が自分の力を過信せず、現状に満足することなく、努力を積み上げてきた結果だと思えます。

また、今年は6年生の活躍が目立ちました。国試に向けた勉強、マッチングなどが重なる忙しい時期の東医体への出場。その中で6年間の努力が実り、結果として現れたのはとても喜ばしいことです。今年の東医体で活躍した6年生全員に、群馬大学の部活動を大いに盛り上げていただいたことを感謝したいと思います。

また昨年に続き、このような素晴らしい成績を残せたのは、各部活が日々東医体に向け練習を重ねてきた結果であると思えます。少ない練習時間の中、最も効率の良い練習方法を考え、実践することが大切なのだと感じました。運動部会としてもこのような結果となったのは大変うれしく思うと同時に、ご支援、ご協力いただいている同窓会会員の皆様には感謝の言葉もございません。来年度は、学生共々さらなるトレーニングに励み、各部活今年以上の結果を残せるよう、運動部会も全力でサポートさせていただく所存でございますので、恐縮ですが、今後ともご支援・ご協力を宜しくお願い致します。

野球部	2回戦敗退
サッカー部	準優勝
ゴルフ部	男子団体 3位 男子個人 鍋岡昇慶(6年)6位、朝鳥洋介(6年)7位
バドミントン部	男子団体初戦敗退 女子団体 3位 女子ダブルス 稲葉(6年)・岡部(4年) ベアベスト16 網塚(3年)・登坂(4年) ベアベスト32 女子シングルス 稲葉美夏(6年)3位、網塚まり香(3年) ベスト32、金子優花(1年) ベスト32 男子ダブルス 布施(6年)・新井(3年) ベアベスト16 吉田(5年)・浅見(3年) ベアベスト16 男子シングルス 布施智博(6年) ベスト32
陸上部	男子総合 6位 男子トラックの部 6位 男子4×400mリレー 1位 男子400m 河合健司(5年)3位 男子走幅跳び今井啓之(5年)3位 女子トラックの部 6位 女子400m 村上ひかる(2年)2位 女子800m 村上ひかる(2年)2位
水泳部	女子50m平泳ぎ 須永風由子(4年) 1位 女子100m 平泳ぎ 須永風由子(4年) 1位 男子200m 平泳ぎ 稲川貴一(3年) 1位
硬式テニス部	男子団体 ベスト8 女子団体 準優勝
軟式テニス部	男子団体 3位 男子個人 西川(6年)・江澤(4年) ベア4位 竹部(5年)・阿部(6年) ベアベスト32 大瀧(2年)・安藤(2年) ベアベスト32 女子団体 予選敗退
卓球部	男子団体 予選敗退 男子シングルス 小林真之(2年) ベスト64 男子ダブルス 澤崎(3年)・小林(2年) ベアベスト16 女子団体 予選敗退 女子シングルス 清水春香(5年) ベスト16 土橋里美(6年) ベスト32
柔道部	男子団体 予選敗退 男子個人 81kg超級 稲川克志(4年) 準優勝
剣道部	女子団体 3位 女子個人 塚田蓉子(5年) 3位
弓道部	女子個人 岩田早紀(5年) 4位
バレー部	男子 準優勝 女子 準優勝
バスケ部	男子 優勝 女子 3回戦敗退

バスケットボール部優勝報告

バスケットボール部代表

須田 祥平 (医学科4年)

群馬大学医学部バスケットボール部は、今年度の第61回東日本医科学生総合体育大会(東医体)において、一昨年度、昨年度に引き続き優勝し3連覇という結果を残せたことをここに報告いたします。

私たちバスケットボール部はプレイヤー25人、マネージャー9名で月水金の3日間、3時間の練習をしています。また、週末には他大学やクラブチームとの練習試合等を行っています。

今年度の東医体バスケットボール競技は、岩手県の一関市総合体育館で8月1日から5日にかけて行われました。初戦は危なげなく勝つことができましたが、2回戦では気の緩み、油断から本来なら苦戦しない相手に苦戦を強いられ、メンタル面で課題を残す結果となりました。この試合をきっかけにもう一度気を引き締め、続く準々決勝、準決勝、決勝ではチーム一丸となり戦い、優勝することができました。

このような結果を残すまでの道のりは決して平坦なものではありませんでした。昨年度の東医体で今までの主力であった先輩方が多く引退し、チーム状況が大きく変わったことで、昨年度の秋の大会、今年度の春の大会では思うような結果を残すことができませんでした。この結果から、私たちは勝つためにチームを大きく変化させる決断をしました。基礎的なところは継続し、変えなければいけない所を変化させ、試行錯誤をしながら何とか形にすることができました。これは全員が協力して勝利という目標に向かうことができた結果だと思います。

キャプテンの1年間を通して、今の強い群大があるのは先輩方が積み上げてきたものがあったことだと強く感じました。この伝統を守っていけるように今度は自分が後輩たちに伝えていかなければいけないと思っています。このような経験をさせてくれたチームメイトには感謝しています。

最後になりますが、今回このような結果を取ることができたのも、いつも部活を温かく支えてくださるOB・OGの先生方のおかげです。この場をお借りして感謝を申し上げます。これからも群馬大学医学部バスケットボール部を益々盛り上げていく所存ですので、今後ともよろしく願いいたします。



優勝後会場にて(平成30年8月5日 一関市総合体育館)

コロンビア・サバナ大学交換留学報告

サバナ大学で 学んだことを糧に

中田裕香理 (医学科5年)

今年の夏にコロンビア共和国にあるサバナ大学の留学プログラムに参加させていただきました。この場をお借りして、私が学んだことをご報告させていただきます。

コロンビア共和国は南米の北西部に位置し、日本から約14000km離れています。首都ボゴタは赤道直下ですが、富士山7合目と同じくらいの標高2640mでとても涼しく、朝晩はダウンジャケットが必要なほどの気候でした。

実習ではサバナ大学の附属病院を見学したり、郊外の町である Tabio, Tenjo の診療所で診療に参加させてもらいました。コロンビアでは医学部は7年制で、3年生から病院で臨床実習に参加し始めます。医学生たちは医者の中で見学するのではなく、医療チームの一員として責任感を持って診療に参加していることが印象に残りました。身体所見を一人で行き、患者さんに病状や治療方針を説明し、指導医に教えてもらいながら処方箋の記載も行っていました。

た。初対面で言語も通じない外国の学生が診察すると、患者さんが不快に感じるのではないかと思いましたが、私たちに対してとても寛容で快く受け入れてくださいました。医学生それぞれが熱心に勉強に取り組んでおり、コロンビアの医学教育のレベルの高さに驚きました。

診療所の医者は家庭医であるゆえ、患者さんは高齢者から乳幼児までと幅広く、糖尿病や高血圧などの疾患はコロンビアでも多く見られていました。3ヶ月検診では、身長・体重測定や原始反射の有無の確認、保育環境の聞き取りなど日本と同じような内容を行っていました。泣き続ける赤ちゃんをあやしながら、ほっこりした気持ちになりました。

実習以外にも先生方やホストファミリーに様々な観光地に連れて行っていただき、現地の食べ物や文化にもたくさん触れることができました。私たちをあたたかく迎え入れてくれたコロンビアの方々の優しさを忘れることはありません。現地で学んだことを糧に、今まで以上に勉学に励んでいきたいと思えます。

最後になりますが、多大なご支援をいただいた同窓会や後援会の皆様、引率して下さった鯉淵典之教授、諸先生方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

コロンビア・サバナ大学 留学を終えて

峰村 成 (医学科5年)

夏休みの2週間を利用してコロンビアのサバナ大学に留学をしました。コロンビアまでの移動時間は約1日で長時間の移動は大変でしたが、空港では現地の先生方が温かくお出迎えしてくださり、これからの留学生活に期待が高まりました。

実習では首都ボゴタにおける先端医療と山間部における地域医療を見学することができました。山間部では十分な医療機器がない中で、一人一人の患者さんから丁寧に問診をとっていました。患者さんの

家族状況や経済状況も考慮した上で今後の治療方針を決めていたのが印象深いです。日本と大きく異なる点は医学生が実際に患者さんを診察し、医療に携わっていたことです。日本では医学生のみで診察を行うことがありません。そのため自分と同年代の医学生が一人前の医師として活躍している姿に衝撃を受けました。今後は積極的に医療に関わり、知識だけでなく実際に医師として働く技術も身につけたいと強く感じました。

留学を通じて医学だけでなく医療制度や文化、スペイン語などを学ぶことができました。コロンビアの街並みや有名な建造物を目にしたときは規模の大きさに驚くと共に文化の違いを感じました。本やネットで調べるだけでは味わうことができない感動

に出会うことができました。

コロンビアは治安の問題や母国語がスペイン語であるため、留学としてはハードルが高いと考えていました。しかし、実習を行う地域は治安が保たれており、多くの医学生が英語を話すことができるため、無事に実習を行うことができました。またホストファミリーは私のことを家族として温かく迎え入れてくれました。伝統料理を作ってくれたり、パーティーを開いてくれたり、とても楽しく生活を送る

ことができました。外国の医療やコロンビアに興味のある人にとって本プログラムは非常に素晴らしい機会だと思います。留学でしか経験できないこともあり、興味のある学生にはぜひこの留学プログラムに参加することをお勧めします。

最後になりますが、本留学をご支援してくださいました皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

コロンビアで学んだ、大切なこと

安倍 有紀 (医学科4年)

以前の私がコロンビアに抱いていた印象は『途上国』『危険』『暑そう』と、あまりにもステレオタイプで固まったものでした。そのイメージは一変、温かい人々に囲まれ、気付きと学びの多い時間を過ごさせて頂いた事をとても幸運に思います。

日本では灼熱の日々が続く8月、訪れた首都のボゴタは富士山の7合目程度の標高で、赤道直下に位置するにも関わらずコートが欠かせない寒さでした。実習はボゴタの隣町・チアにあるサバナ大学の教授主導の下に行われました。先進国に遅れを取らない設備の整ったサバナ大学の大学病院や関連病院、そして、少し離れた田舎町にある貧困層が訪れる無料の診療所にも訪れました。限られた医療資源で研修医の先生が問診に重きを置き、学生が身体所見をとる状況にはとても驚かされました。私のペアの医学生の「ただ立って見ているだけでは出来ることも出来なくなってしまうからね。」という言葉はとても胸に刺さりました。

その他にも学生主導で行われている貧困層のママを対象にした集会『コミュニティ』にも参加しました。お悩み相談所、交流の場、託児所など、様々な意義のある集会でした。学生が自主性と責任感を持って学び、活動している姿は同じ医学生としてとても刺激されました。彼らのメンタリティーに感化され、私達も在コロンビア日本大使館の見学や、現地の授業を受講するなど予定外のプランにも積極的に取り組むことができました。

また、コロンビア女性の社会的地位もとても印象的でした。コミュニティのような場所を設けていることだけでなく、医学生の7割は女性であったり、寡婦をサポートするような企業があったり、先進国以上の男女参画社会が成立していて学ぶことの多さを感じました。それと同時に今日までに学んできた医学知識や語学はワールドワイドに通用すると確認できたことは今後の学びに対する大いなる活力にもなりました。より一層精進しなければならない！と心から感じさせられる2週間でした。

最後になりましたが、この場をお借りしてこのような貴重な機会を与えてくださり、サポートして下さった鯉淵先生をはじめとする各関係者の方々に深く御礼申し上げます。

サバナ大学 夏季臨床実習に参加して

柴田実央子 (医学科4年)

先8月7日～18日、南米コロンビアへ臨床実習に行って参りました。大学の勉学と部活動とアルバイト

とを両立しながら試験を乗り越える日々のなかで、自分の視野を広げたいと思った矢先に本実習の応募を見つけました。また英語を学ぶ意欲があり、その機会としても大変魅力的でした。

訪れたコロンビアの首都ボゴタは標高が2,600mと高く、強い日差しと酸素が薄く乾いた空気、あらゆる建物の窓に光る鉄格子、そしてどこでも流れて

いる陽気なラテン音楽が印象的でした。ボゴタから車で40分ほどの町チアにあるサバナ大学の教授のお宅にホームステイさせていただきながら、サバナ大学病院、田舎の町テンホとタビオにある診療所、首都ボゴタにある大病院や母子保健に関する教育施設など、実に多様な医療機関で実習をさせていただきました。

初日に医学部長や病院長にご挨拶する機会があり、女性の医学部長から医学生の7割程が女性と聞きました。当たり前ですが大学病院や診療所で働く医師も女性が圧倒的に多く、日本と対照的な光景に驚くとともに、将来の女医としての生き方に悩む身として考えることが多くありました。また現地の学生たちは日本より長期間のポリクリで、患者さんに積極的に関わり、臨床の現場でより動けるよう学びを深めていました。英語も流暢に話しており、見習

いたい面が多くありました。

田舎の診療所の外来見学では、一人の患者さんの問診や身体診察に1時間以上かけており、田舎の診療所に通う患者さんには使用できる医療資源も限られているためにほとんど問診のみで診断に繋げることがモットーとしているため、とのことでした。その地域の事情に合わせた医療とは何か、考えさせられました。

拙いご報告となってしまいましたが、上記のこと以外にも非常に多くのことをこの実習で学び、大変貴重な経験となりました。この経験をどう活かしていくのか、これからの課題として考えていきたいと思えます。この場をお借りして、ご支援くださった刀城会、後援会の皆様、関係者の方々に心からお礼を申し上げます。

コロンビア共和国での 臨床実習を終えて

吉田 沙矢 (医学科4年)

この度、コロンビア共和国のサバナ大学との交換留学プログラムで約2週間の臨床実習を経験させていただきました。この場をお借りして、そのご報告させていただければと思います。

実習はサバナ大学附属病院や首都ボゴタの大きな市中病院といった都心部の病院と、地方都市の診療所と両方でさせて頂きました。都市部の病院は設備が充実したきれいな病院で、地域というより国の医療の中心的な役割を担っているようでした。現にサバナ大学の附属病院はリハビリが有名で、病院内にリハビリのためのプールまで完備されており全国から患者さんが訪れます。医師や看護師の人数も多く日本の大きな病院と同じような印象でした。ER や心疾患の病棟を見学させていただき、様々な症例を診ることができました。

一方、私たちが滞在していたチアから車で1時間ほどのテンホという地方都市の診療所は、CT やMRI などの設備はなくカルテもすべて手書きで、外来の患者さんは1日約15人と小さな診療所とし

た。テンホは山を切り拓いた都市で、診療所まで来ることができない人のために往診も多く行われています。外来では1人につき30分ほどかけて症状、現病歴、既往歴や家族構成、家庭の状況、信仰する宗教までじっくりと聞いていました。外来にいらっしゃる患者さんは慢性疾患の方が多かったのですが、その疾患の成因は日本と少し異なっており、例えば COPD は、その原因はタバコなどではなくその地域特有の薪を使った調理方法によるものでした。一方で予防医療が充実している面があり、女性は25歳から子宮頸がん、50歳から乳がんの検診が毎年受けられます。テンホは山の上の方に住んでいる方が多く検診を忘れないようにするために毎年となっているようです。外来に来る患者さんを様々な面から考える姿はとても勉強になりました。

実習中には学生が公用語のスペイン語を英訳してくれ、私が理解できるように丁寧に説明してくれました。また休日には遊びに連れ出してくれて、様々な人々との交流の中でコロンビアの文化や多様な価値観に触れ、充実した日々を過ごすことができました。

最後になりましたが、このプログラムにあたりご支援くださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

サバナ大学交換留学思い出 Snap

群大生5人の集合写真▶



▼母子保健施設で、複数の大学の医学生たちと



▲学生と一緒に昼食

サバナ大学附属病院にて▶



▲ボゴタ市内の教会にて





訪問インタビュー 奈良編

奈良県立医科大学 医学部 放射線腫瘍医学講座 教授

長谷川正俊 先生を訪ねて

板垣由宇也 (医学科4年)

大玉 浩嗣 (医学科3年)

佐藤 聖佳 (医学科3年)



私たちは平成30年8月9日に、奈良県立医科大学でご活躍されている、長谷川正俊先生を訪問しました。



奈良県立医科大学附属病院前にて

学生：本日はよろしくお願ひ致します。長谷川先生の現在のお仕事について聞かせて頂いてもよろしいでしょうか。

先生：大学の教員なので、原則的には、まずは教育が一番大事だと思っています。放射線治療が専門なので、放射線治療、放射線腫瘍学、癌全般の腫瘍学、放射線の扱い方などについて大学の学生、大学院生、大学の諸先生に講義等を行っています。また、臨床教育部長としても頑張っています。

さらに、学内だけでなく、学外でも教育を行っています。その一つに、奈良県のがん対策としての教育活動があります。奈良県がん対策推進協議会の会長を10年以上やっていますが、がん対策の計画だけでなく、実践にも関わって、がん教育として小中学校、高校に出向き、私自身が授業をしたり、学校の先生が授業をするのを視察したりしています。さらに、中学、高校の先生にがん教育のための講義も行っています。

前述のように、本来なら教育が一番だと考えていますが、実際には、病院の放射線治療・核医学科の部長でもあり、診療に対しても大きな責任があります。

したがって、毎朝のカンファレンスだったり、診療経過のチェックだったりがあり、(以前と比べると直接患者さんを診る時間は減りましたが)さまざまなスタッフと診療に携わっているので、現実的には診療している時間が大部分を占めています。診療は放射線治療が主体ですが、放射線治療だけに特化した治療というのは非常に少なくなっています。がんの集学的治療という言葉があるように、いろいろな分野をいかに上手く連携して治療するかが大切で、各科の先生がばらばらに治療するのでは良い治療ができません。そこで、そういう取りまとめが重要になっています。放射線治療だけでなく、手術はどうか、薬物療法はどうかということを考えて、各科をどう繋ぐのかに力を入れています。治療が難しい患者さんが来たら相談し合って、という感じです。そういうことを、定期的に、体系的にやる必要があるのです。私たちはいわゆる cancer board を毎日のようにやっています。今日は肺がんの cancer board の日、今日は頭頸部癌の cancer board の日という様に毎日、各科の先生が集まって協議しています。非常に治療が難しい患者さん、ガイドラインを見ても方針がわからないような患者さんもかなりいますが、我々としてはそれなりに適切な対応ができていいる可能性が高いと感じています。

また、日本放射線腫瘍学会の理事として、がん治療の専門家、特に放射線治療専門医を育成して、認定する責任者もしています。

他にも、病院内のがん診療対策プロジェクトというのがあり、そのリーダーになっています。奈良医大は都道府県がん診療連携拠点病院ですので、それに関するまとめ役として、病院レベルでいろいろな実務の取りまとめを行っています。

研究は、基礎的なものでは、放射線生物学をやっています。重粒子線とか陽子線等が、普段使っているX線等の放射線とどう違うかという、粒子線治療の放射線生物学的研究です。ただ、奈良医大には重粒子線や陽子線はないので、現在でも年に数回、千葉市にある放射線医学総合研究所に研究に行っています。ただし、最近、奈良県に陽子線施設ができた

め、来月からはそちらでも研究を行う予定です。粒子線治療に関する放射線生物学を長年やっているのに加えて、細胞死、特に放射線誘発アポトーシスについても昔から研究をやっています。しかし、診療や会議、学会活動、広い意味での社会活動が多いために、研究の時間がなかなか取れないので大変です。

学生：長谷川先生は研究と診療のどちらがお好きなのでしょう。

先生：個人的な興味では研究の方が好きです。ただし、現実的な優先順位は、教育、診療、研究の順でやらざるをえないという感じです。先ほども言ったように教育が本分であるし、診療は患者さんがいるためにやらないといけません。これは悩ましいところです。今、社会では、さんざん、働き方改革とか時間外労働が問題とか言われていますが、現実的に今の医療現場では、忙しいところはほんとに忙しくて、集中するところには極端に集中します。がん対策もそうです。誰でもそれなりに自分の専門はできますが、がん全般というと容易ではありません。例えば肺がんやっている人が、子宮がんも分かるかというよく分からないことが多いと思われま。内科の人が手術のことを分かるかという、それもなかなか分からないですね。結局、がん対策において、全体を十分に理解してまとめていくことができる人があまりいませんので、県庁も病院長もがんに関することの多くを私の所に持って来ます。奈良県のがん対策では、この10年間の発展を高く評価していただいています。その分、こちらの仕事が増えます。困っています。

ただし、通常、大学の正規の教員のポストは簡単に増やせないのですが、私が来てから、例外的に放射線腫瘍医学講座のポストを増やしていただくことができました。その結果、放射線治療関連の教員数は、群馬大学、京都大学の次くらいに多くなったかもしれません。しかしそれでも、全然大人手が足りません。時間外労働を相当やらなくては成り立ちません。

学生：お忙しい中今回のインタビューに時間を割いていただきありがとうございます。それでは、長谷川先生の過去のことをお聞かせください。なぜ放射線治療の道に進まれたのでしょうか。

先生：まず、がんを治したいと思ったのが始まりです。がんを治すといっても色々ありますが、もともと家族ががんで亡くなったこともあって、少なくともがんを治せる医師になりたいという気持ちが中学生、高校生の頃からありました。それで、医学部に入って

からどうしようかと考え、一年生の頃から病理の教室に通いました。当時の第一病理学教室は、今の教授の前の前の石田陽一先生が教授になられたばかりでした。1976年、当時の医進一年生の時にがんを治したいという思いで病理の教室に行ってから、40年以上、悪性腫瘍、特に脳腫瘍の道に進むことになりました。当時は卒業後、すぐに大学院に行きましたので、医学部を1982年に卒業して、そのまま病理の大学院に4年間行って、そのあとは放射線科（放射線治療）に行こうと思っていたのですが、色々あり、そのあとさらに2年間、深谷赤十字病院で病理をやってから、1988年に当時の放射線医学教室（放射線科）に移りました。まもなく、大学から、前橋赤十字病院の放射線科に移って研鑽を積み、大学には5年後の1993年に戻り、それ以降は2005年に奈良に異動となるまで（1年間の米国留学以外は）ほぼ群馬大学にいました。

病理から放射線に移ったのは、本来、がんを治せる医師になることをめざしていたからです。病理は治療法の研究や診断にとっても役に立ちますが、病理で直接治せるわけではないので、がんを治せるのは何かと考えたことがきっかけでした。まずは内科に行くのはどうかと考えたのですが、抗がん剤で完全になおすることができるがんはほとんどありませんでした。今でこそ分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬といったものができ、根治は無理でも、昔だったらすぐに死んでしまったような人の一部が、比較的長生きできるようになったのですが、1980年代の薬物療法にはあまり期待できませんでした。外科に行くという考えも一時ありましたが、外科では器用かどうか、瞬間的にベストな判断ができるかということが求められると思ひ、さらに私自身が昔から複数の病気を持っていたこともあり、常にベストな体調を維持することは難しいと考えて、断念しました。当時、放射線科には新



放射線治療室にて

部先生(助教授、後に教授)がいらっしゃいました。そのころは、放射線でがんが治せるなんて思っている人はあまりいませんでしたが、新部先生の講義を受けて、意外と治せる、放射線治療はがんの根治的治療になりうると考えるようになりました。また、放射線治療では、手術と違って、じっくり考える時間があることも私にとってはよい点でした。みんなで検討して計画を立てたり、分割しても放射線をあてたり、色々試行錯誤しながら、納得いくまで時間をかけて根治的治療を追求できる。こういう面が自分に向いていると思いました。

学生：先生の仕事に対する姿勢がちょっと伺えたのですが、働くうえで心掛けていることを教えて頂いて良いでしょうか。

先生：総論的に言うなら、常にベストを尽くすということです。自分が納得できるまで、いい加減なことをせず、最善を尽くすということです。人の命を預かる仕事です。いい加減な気持ちでやる仕事ではありません。常に全力でやることです。

芸術家が人と違う絵をかいて評価される時には、人が考えられない発想で創作するから評価されるという独創性、個性もありうると思います。しかし、医学では、安易に、試しにやってみるということではできません。いい加減なこともできません。慎重かつ真剣に取り組んでいくことが必要条件です。もちろん、芸術家がいい加減にやっているというわけではないと思いますが……(笑)。

また、姑息治療だからいい加減でよいなどということはないと思っています。個々の患者さんにとってそれぞれにベストな治療法があると思われまます。長くても短くても、患者さんの人生はそれなりに価値があるはずで。例えば、根治できなくても、半年でも一年でも元気に生きられる治療法があるのであれば、必要なら日数かかっても、真剣に、難しい治療計画を作って実施するというに、日々、まじめにディスカッションして取り組んでいます。すなわち、単に割り切ってやるのではなく、やる時には全力を尽くしています。

学生：先ほど研究室に通われていたという話を伺いましたが、学生時代について他にもお話を聞かせて頂いてもよろしいでしょうか。

先生：病理の研究室のほかには、弓道部に入っていました。また、腫瘍免疫の実験に参加したこともありましたが、ただし、以前からの病気が問題でした。病

気になった中学三年の時は半分くらいしか学校に行きませんでした。慢性腎炎だったので、高校でも体育は見学で、ほとんど運動はできませんでした。それでも、弓道部なら、なんとかやっていると、入部しました。弓道部でもいろいろありましたが、一応、なんとか卒業まで続けることができました。

学生：研究室はどれくらい通われていたのでしょうか

先生：大学の勉強もありましたので、講義がある時には頻繁に行くことができず、主に夏休みや春休みに通っていました。病理解剖などを手伝わせていただきながら、病理学の基礎を勉強させていただきました。当時、教えていただいたことは、その後の腫瘍学の修得に大いに役立ちました(山口先生、中里先生、石田先生をはじめとする多くの先生方に本当にお世話になりました)。

その他に、大学の時にやっていたことをあえて言うなら、6年間の講義に99パーセント以上出ていたことです。休んだのは、よほどのことがあった時の数回だけです。ただし、卒業する時になって思ったのは、ただ漫然と出ただけでは意味がなかったということです。そのため、私の講義では、(出る価値があると思って)出たい人だけ出席すればよいということにしてきました。しかし、最近、奈良医大は厳しくなって、3分の2以上出席しないと試験を受けられなくなるので、そういうわけにもいなくなっています。

見た目は、一見、真面目な学生だったかなと思います。ただ、真面目に講義に出ていただけでしたので、その時間を(他のことで)もっと有効に使っても良かったかなとも後になって思いました。

我々の時は冬山診療班というのがあり、尾瀬戸倉のスキー場のロッジのようなところへ学生が交代で行き、スキーで怪我をした人がくると簡単な処置をしていました。重症の場合には、初期手当をしてから病院に送りました。(約40年前の平和な時代でした。)休日には整形外科の先生にも来ていただき、外傷の処置を手伝わせていただきました。私はそれほど行かなかったのですが、講義を欠席して頻繁に行っている同級生もいました。ただし、講義や実習の時に、不在(欠席?)でも、冬山診療班行っています!という、そうか、そちらの方が大事だな!という先生もいたと記憶しています。

学生：学生時代にやっておいてよかったこと、やっておけばよかったことはありますか?

先生：もともと、それなりのポリシーがあったので、

病理の教室に行ったことはよかったと思います。結果的には医学部卒業後に、病理の教室に入ったので、別に学生のうちから行かなくても同じことを勉強できたのかもしれないのですが、実際に病理解剖をしたり、病理組織標本をみたりしたことで、実習とは違った意味で、病理を知ることができました。学生の時からのそういう経験が、その後、癌にどのように取り組むかということのベースになりました。病理については、もちろん卒業してからの六年間の方がはるかに重要ですが、学生のうちに経験したことが、いろいろな意味で将来を考えたり、勉強したりするのに役立ちましたので、病理の研究室にいたことはほんとうによかったと思います。

弓道部にいたことも、先輩や後輩など色々な人と関わったのでとてもよかったと思います。何もしていないのはよくないと思います。医療においては、医学的知識があるだけでは不十分で、いろいろなことを経験している必要があります。また、自分よりはるかに人生経験がある人を相手にしないといけないこともあります。そういう意味では、学生時代には（講義出ただけでなく）もっと社会のいろいろなものを見ておけばよかったかなと思います。

学生：休日や余暇はどのように過ごされているのでしょうか。

先生：ほとんど休日はないですね（笑）。何も予定のない日が月に1、2日あるかどうかですが、そこでたままった仕事を片付けているので、実質的には休日はありません。（単身赴任なので）たまに家に帰っても、催促されている原稿を書いたり、家の周りの生垣の枝を切ったり、猫の世話をしたり（猫と遊んでいるだけ？）という感じです。気分転換にドライブだけでも行ければよいのですが。

学生：それだけお忙しい中で、やりがいを感じるのどのようなことでしょうか

先生：私がやったからそこまでできた仕事、私がやったから世のため人のためになったことでしょうか。そういうことは人のために役立つだけでなく、評価もされるし、自分のやりがいにもなります。

たとえば、奈良県のがん対策があります。十数年前に私が会長をやることになったのですが、その時点では奈良県のがん対策は全国で最下位でした。奈良県はすごく遅れていると言われていました。それが今では、全国レベルの研究会や会議に行くと、奈良県はすごいですねといつも褒められ、奈良県のがん

対策は全国トップクラスと言われていています。元々県庁がやる仕事も多いのですが、具体的に動かずに、次年度に先送りしようとするが多かったので、強引に、その年度中になんとかしようと思ってきました。すぐにできると言うのと、できないと言われるので、それなら私がやると言って引き受けたこともありました。例えば、がん教育なども、その年度からすぐに始めることにしました。ただし、強引にやると言っても、学校の先生ががん教育になれていませんでしたので、結局、それならお願いしますと県から頼まれ、私の仕事が雪だるま式に増えました。もちろん、私以外の多くの人の頑張りもあってのことですが、その後、県のがん対策はトップクラスと言われるようになり、注目されています。

放射線治療でも、同じようなことでやりがいを感じています。他の病院だったらガイドラインどおりの治療だけれども、当院だったらテーラーメイド治療というように、普通だったら型通りやるところを、患者さんに合わせてやることもあります。ただし、無理にやっても変わらないと思えば、余計なことはやらずに、早く帰れるようにしています。でも、頑張れば、もしかしたら何年も生きられるかもしれないと思ったら、頑張ります。そこを見極めてどういう治療ができるのかを考えることがポイントです。例えば、もう末期と言われていた患者さんに、（長期生存の可能性を考えて）姑息治療の数倍くらいの治療をしたことがありました。普通だったらやりすぎだと言われるのですが、それでもやりました（もちろんやりすぎには注意しなくてはいいけません）。実は、その人はもう6年も7年も生きています。最初に紹介されて来た時には麻痺があったのですが、今でも元気に過ごされています。また、他の放射線抵抗性の腫瘍の患者さんは、陽子線治療でも無理と言われ、当院に来た時には多発性転移と脊髄の圧迫がありましたが、本人の強い希望もあって、高精度治療を頑張ってやったことで、その後数年間、元気で過ごすことができました。これらの方々は極端な例かもしれませんが、すぐ死ぬ、すぐ麻痺と言われていた方でも、当院で個別化治療をやったことが、結果的に患者さんの役に立てたことはそれほど珍しくありません。

奈良に来て思うのは、まずは奈良県のためになることをするという事です。奈良県立医大は、奈良県の病院の中では、がん診療、特に放射線治療では文句なしのトップになりました。この十数年間で、奈良県のがん診療、がん対策全般のレベルが上がったと思います。特に放射線治療や、cancer board を積極的

にすすめてきました。全国レベルでの取り組みも当然、重要ですが、地域医療の現場の発展、充実への貢献も非常に重要です。

学生：先生が奈良に来たことによる、群馬大学と奈良県立医科大学とのつながりはあるのでしょうか。

先生：群馬大学と奈良医大とは多少の人の異動はあるようですが、それほど交流はありません。私は群馬大学同門会の関西支店長だと冗談で言っています(笑)。

群馬大学の放射線治療は重粒子線治療をはじめとして、全国トップレベルで、特に関東ではよく知られていますが、私が関西に来たことで、群馬大学が全国区になれたのかなと勝手に思っています。群馬大学のやや弱いところは、全国区とは言い難いところですが、群馬大学の重粒子線治療が関西にも周知されるきっかけにでもなってくれればと思っています。

学生：最後に、今後の展望についてお聞かせください。

先生：13年間、奈良医大のがん診療のレベルを上げることには貢献出来たと思われるので、その完成度を高めると同時にそろそろ引き継ぎを行っていきたくと思っています。また、粒子線治療が関連病院で始まるので、それも軌道に乗せて行きたいと考えています。県外の施設とも連携しながら、更に診療を発展させ、また、臨床教育部長として、教育もさらに充実させていきたいと思っています。

今回、長谷川先生には、ご自身のご経歴や現在のお仕事に関すること、お仕事に対する心構えなどについて、貴重なお話をたくさんしていただきました。インタビュー後は近くの名所に連れて行ってくださり、そのあとは夕食もご一緒させてくださいました。お忙しい中私たちの訪問を快く受け入れて頂いたこと、深く感謝申し上げます。



東大寺にて

学会報告 (同窓会補助)

第43回リザーバー研究会を 開催して



応用画像医学講座(寄付講座)・核医学科
特任准教授 **宮崎 将也** (平13卒)

平成30年8月31日(金)、9月1日(土)に、前橋テルサにおきまして、第43回リザーバー研究会を開催させていただきましたことをご報告いたします。本研究会の開催にあたり、群馬大学医学部同窓会より温かいご支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

本研究会はリザーバー(最近ではポートとも呼ばれます)と呼ばれる小さなケースをカテーテルと接続し皮下に埋め込むことで動脈や静脈へさまざまな薬剤を簡便に注入することができるようになる医療用デバイスに関する研究会です。かつては肝動注リザーバー療法に関する技術や治療法について活発な議論が行われる場でしたが、最近では中心静脈リザーバー(ポート)に関する演題も多く、看護師や診療放射線技師など多職種が参加する研究会となっています。

今回の研究会ではテーマを“with リザーバー”としました。これは近年の医療の発達によりリザーバー療法単独で治療が完遂することはなく、さまざまな治療法とコラボレーションすることがリザーバー療法を発展させる上で重要と考えたからです。このテーマに沿って肝がんに対するマイクロ波凝固療法、凍結療法、重粒子線治療などの最新の局所療法に関する講演や、近年注目を集めている免疫医療とリザーバー療法の併用の可能性を探る講演を特別企画としてエキスパートの先生方を招き行っていただきました。また、「肝動注リザーバー療法に関するガイドライン」作成プロジェクトの公聴会も実施され活発な議論が交わされました。

本会は前橋観光コンベンション協会からもご協力いただいております。9月1日には山本龍前橋市長、前橋商工会議所会頭曾我孝之様よりご挨拶をいただきました。研究会内の託児・ワークショップでは前橋清心幼稚園にもご協力いただきました。

皆様のご協力のもと300名近い医療関係者の皆様にご参加いただき盛会のもと会を終了することができました。同窓会会員の皆様方に重ねて厚く御礼申し上げます。

支 部 だ よ り

平成30年度 埼玉医科大学、 群馬大学同窓講演会・懇親会

埼玉医科大学リウマチ膠原病科
梶山 浩 (平5卒)

9月5日に第7回埼玉医科大学群馬大学同窓講演会を開催しました。

東武川越ホテルに福井大学 学術研究院 医学系部門 医学領域 病態制御医学講座 内科学(3)分野の石塚全教授(昭59卒)をお招きし、最新の肺がん治療についてご講演を賜りました。標準の治療法から最近の免疫チェックポイント阻害剤を用いた治療法、また、ALK 遺伝子や EGFR 遺伝子変異の有無、PD-L1 発現の有無での治療成績の差、肺癌に対する放射線療法など、ご自身の膨大なデータも交えてご教示いただき、大変感銘を受けました。

その後、割烹「川島」で懇親会。昭和55年卒内田クリニック 院長 内田治先生の乾杯のご発声で始まり、卒業年度順に近況報告。昭和57年卒防衛医科大学校脳神経外科森健太郎先生、また、石塚先生と同期、昭和59年卒では、さいたま市立病院消化器内科 加藤まゆみ先生、埼玉医科大学総合医療センター消化管・一般外科 石田秀行先生、埼玉県立がんセンター消化器外科 川島吉之先生、清水小児科

アレルギークリニック 清水俊男先生、東松山市立市民病院麻酔科 菅谷壮男先生、寄居中央眼科 壺内鉄朗先生、さいたま協同病院副院長 雪田慎二先生、と多くの先生方のご参加がありました。

近況報告は続き、昭和61年卒 さいたま赤十字病院 外科 中村純一先生、昭和63年卒 埼玉医科大学 総合医療センター 眼科 小幡博人先生、昭和63年卒 埼玉医科大学 総合医療センター 放射線腫瘍科 高橋健夫先生、平成3年卒 消化管・一般外科 石橋敬一郎先生、平成4年卒 埼玉医科大学

微生物学教室 村上孝先生、埼玉医科大学 国際医療センター 呼吸器内科 平成9年卒 解良恭一先生、平成14年卒 同 国際医療センター 放射線腫瘍科 野田真永先生、平成15年卒 自治医科大学 附属さいたま医療センター 放射線科 白井克幸先生、平成15年卒 埼玉医科大学 総合医療センター 消化管・一般外科 豊増嘉高先生と平成5年卒 埼玉医科大学リウマチ膠原病科の私、梶山含め総勢19人と大盛会となりました。

前回から学外の先生にもお声かけさせていただいており、今回は、埼玉医科大学内外から多数の先生方のご参加がありました。解良先生、野田先生、白井先生、と平成卒の若い教授のご活躍も伺え、群馬大学の埼玉での勢いを感じます。来年も開催予定ですので、埼玉でご活躍の先生方、是非ご一報下さい。この会の今後の益々の発展を祈念して筆をおきます。



平成30年度埼玉医科大学・群馬大学同窓会(平成30年9月5日 割烹「川島」)

刀城クラブ北陸支部総会報告

副支部長 草島 義徳 (昭50卒)

平成30年9月8日(土)午後7時より北陸支部総会がホテル日航金沢の桃李で行われました。今回も佐原博之先生(昭63卒)幹事のもと、会務報告と懇親会を行いました。まずは会長 村本卓郎先生(昭39卒)の挨拶で始まり、副会長の竹内真人先生(昭45年)の乾杯で懇親会が始まり、大変和やかなひと時を過ごすことが出来ました。

近況報告では早川康浩先生(昭61卒)、佐原博之先生、佐原まゆみ先生(平元卒)の3先生はPCを使ったPPTによるプレゼン形式で報告をされました。早川先生からは厳冬期白山連峰奥地のアイスモンスターなどの珍しい山岳写真を見せていただき、佐原先生はフルサイズのセンサーを搭載したミラーレスタイプのレンズ交換式カメラに関するうんちく講座、奥様のまゆみ先生からは写真展での受賞作品である日の出を背景にした能登島大橋や、七尾湾にいる鳥の写真などの提示があり、どれも大変興味深いプレゼンでした。金沢大学第2外科の宮下知治先生(平5卒)からはハーバード大学などへの今後の海外留学研究のこと、福井大学教授の石塚全先生(昭59

卒)からはこれからの学会・研究活動のことなど希望に満ちた将来展望についてお話を頂きました。また福井市で開業されてる生田敬定先生(昭55卒)からは学生時代の思い出から今日に至るまでの数々の逸話、副会長の福井市開業、竹内真人先生からは最近の診療事情のお話、富山市民病院で呼吸器血管外科センター長をしている瀬川正孝先生(昭61卒)は、今回初出席にて自己紹介と学生時代の運動部の思い出などの話がありました。会長の村本卓郎先生からは学生時代から今日に至るまでの、極めて長期的な医学、人生に対する思いを聞かせて頂きました。最後に報告者の草島は現在所属している富山県健康増進センターでの健診医としての近況報告を行いました。至福の時間は瞬時に過ぎ去り、集合写真を撮って散会となりました。次回は本年4月富山大学医学部放射線診断・治療部 腫瘍学部門の教授に就任された斎藤淳一先生(平9卒)の歓迎会なども含めて予定したいと考えております。

現在刀城クラブ北陸支部には50名近くの間窓生が所属しており、大学、公的病院、医師会また地域医療など様々な分野で活躍中であります。平成27年に、村本卓郎会長の熱い思いで、20年ぶりに復活したこの刀城クラブ北陸支部が今後益々、大きな発展を遂げるよう微力ながら協力して行きたいと思っております。



刀城クラブ北陸支部総会 (ホテル日航金沢 平成30年9月8日)

後列左より：早川康浩 (S61卒)、佐原まゆみ (H元卒)、瀬川正孝 (S61卒)、佐原博之 (S63卒)、宮下知治 (H5卒)
前列左より：石塚全 (S59卒)、竹内真人 (S45卒)、村本卓郎 (S39卒)、草島義徳 (S50卒)、生田敬定 (S55卒)

群馬大学医学部同窓会・ 埼玉支部総会のご報告

埼玉支部第四（東部）地区幹事
犬飼 敏彦（昭53卒）

第12回の群馬大学医学部同窓会・埼玉支部総会が平成30年9月29日（土）17:00より、さいたま市の“ラフレさいたま”で開催されました。埼玉支部は第一（中央）、第二（中南）、第三（北西）、第四（東部）の4地区に分けられており、それぞれの地区に幹事1名、副幹事2名がその任に就いております。本年度は持ち回りルールとして第四地区が担当となり、非力ながら私（犬飼）が当番幹事としてお世話させて頂きました。

出席者は27名であり、3名の女性医師（紅3点!!）にも駆け付けて頂きました。支部総会スタイルは例年通り、前半は講演会、後半は懇親会（着席形式）としました。講演会の部では2名の同窓生をお招きし、基調講演は獨協医科大学埼玉医療センター・小児外科の池田 均教授（昭56卒）に「新生・獨協医科大学埼玉医療センターの紹介」をタイトルに熱演して頂き、スライドの一コマに「赤城山の光景」も

加え、若き医師時代を過ごした前橋へのノスタルジアも強調されました。特別講演は獨協医科大学・内分泌代謝内科の麻生好正教授（昭62卒）に「最先端の糖尿病治療戦略」と題して得意の“麻生節”を披露して頂きました。同講演を通じ、出席者には最近臨床フィールドで脚光を浴びている“糖尿病”の知識の整理になったものと推察されます。

懇親会は、星野修一・埼玉支部長（昭52卒）に開会の辞をお願いし、饗場庄一・元同窓会会長（昭31卒）に乾杯の音頭を取って頂きました。その後はアルコールの余勢も駆って、あっという間に各テーブルともご歓談というよりは“宴会”の様相を呈しました。会を通じ、やはり“同窓の誼”とは実に良いもので、何でも遠慮なく語り合えるのだなという印象を強くしました。“宴会”の後半には、出席者全員に手短な“近況報告”をお願いしましたが、将に予想通り、年配者の先生方は（後輩への進言も含め…）スピーチが若干長くなる傾向がありました。

第三地区幹事の清水庸夫先生（昭46卒）の閉会の辞で会はお開きとなりました。次回は第一地区幹事の山口敦司先生（昭61卒）が当番幹事の予定です。



第12回群馬大学医学部同窓会・埼玉支部総会（平成30年9月29日 ラフレさいたま）

刀城クラブ栃木県支部 平成30年度総会

野口 忠男 (昭41卒)

平成30年6月23日、栃木県支部の総会が開かれました。支部長益田澄夫先生(昭32卒)の挨拶、「最近栃木県からの群馬大学への入学者が少なくなっている様な印象があります。栃木県内の病院には勤務している卒業生もいますが、開業する人も少ないようです。支部にもっと若い人が増えることが期待されます」続いて、獨協医大第一外科准教授山口悟先

生(平7卒)の「大腸がん」についての講演があり、勉強をしました。その後懇親会に移り楽しい語らいの内に時が過ぎました。

出席者(敬称略) 益田澄夫(昭32卒)、佐藤裕司(昭34卒)、荒井良(昭35卒)、伊澤四郎(昭36卒)、竹村喜弘(昭36卒)、上地弘二(昭38卒)、竹沢久武(昭40卒)、富永慶悟(昭40卒)、大和田恒夫(昭41卒)、野口忠男(昭41卒)、渡辺常之(昭47卒)、久保川透(昭49卒)、石川三衛(昭50卒)、木村孔三(昭52卒)、増田典弘(平6卒)、上野修一(平6卒)、山口悟(平7卒)、村松一洋(平10卒)、中島政信(平10卒)、若月優(平14卒)、鮫島舞(平29卒)

刀城クラブ東京支部 第12回総会・講演会・懇親会開催のご案内

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ 東京支部長 堀 貞夫(昭47卒)

第12回刀城クラブ東京支部総会・講演会および懇親会を下記のごとく開催いたします。

東京支部は平成20年3月に創設され、年に1回「東京都に住居を有する者及び東京都内に勤務地のある者」を会員とし「会員相互の親睦を図り、刀城クラブの活動を通して、群馬大学医学部の発展に寄与する」ことを目的に開催されています。

今回の講演会の「特別講演」2題は、東京女子医科大学心臓血管外科主任教授の新浪博士先生(昭和62年卒)と、Fascia会 木村ペインクリニック院長の木村裕明先生(昭和61年卒)のお二人にお願いしました。

新浪先生は群馬大学医学部卒業後、東京女子医科大学心臓血管研究所に入局し同時に大学院に入学されました。Wayne State University (Detroit、米国)、Alfred Hospital (Melbourne、豪州)、Royal North Shore Hospital (Sydney、豪州)に留学後、平成10年に女子医大心研循環器外科に帰局されました。その後女子医大第二病院心臓血管外科、順天堂大学心臓血管外科の助教授を経て、埼玉医科大学心臓血管外科の教授を歴任し、平成29年8月に女子医大心

臓血管外科教授・講座主任に就任されました。医学部卒業後30年余にわたり、心臓血管外科の臨床に傾倒しその総括を下記の演題名で今回ご披露いただきます。

木村先生は群馬大学医学部卒業後、群馬大学附属病院麻酔科に入局し、済生会宇都宮病院、亀田総合病院、伊勢崎市民病院で研鑽され、平成6年に木村ペインクリニックを開設されました。その後本年4月には、一般社団法人整形内科学研究会会長に就任されました。「痛みの原因として、筋膜を含む線維性結合組織(fascia)が注目されている。今回、その治療法として、生理食塩水を用いたエコーガイド下fasciaリリースの具体的な方法を解説する」との前触れを頂きました。私にはあまり聞きなれないキーワードが並ぶ演題でしたので、お忙しい中先生に直接示唆を頂きました。

お二人の先生が最先端で活躍するテーマのお話を伺いたいと思います。

開催案内は東京支部会員に郵送しましたが、東京支部会員以外の各位の講演会での聴講は大歓迎です。是非、ふるってご参加ください。

記

日時：平成31年3月9日(土) 18:20-20:30

場所：渋谷エクセル東急ホテル

特別講演1：新浪博士先生(昭62卒)

【最近の心臓血管外科の動向】30分

特別講演2：木村裕明先生(昭61卒)

【エコーガイド下fasciaリリース 肩こり 腰痛への応用】30分

クラス会だより

昭和63年卒 卒後30周年記念クラス会in加賀屋

佐原 博之 (昭63卒)

昭和最後の年に卒業した私たちは、今年卒後30周年を迎えました。「卒後30周年のクラス会を、加賀屋でやろう!」ということで、平成30年7月15日(日)、和倉温泉の加賀屋で第10回となるクラス会を開催しました。

「加賀屋」という温泉旅館をご存知でしょうか?石川県七尾市の和倉温泉にあり、「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」の総合日本一を36年間連続で獲得した名店です。残念ながら一昨年は第3位に甘んじてしまいましたが、そこからリベンジに燃える若女将の姿はTV番組の「情熱大陸」でも取り上げられ、昨年は見事日本一に返り咲きました。加賀屋は天皇陛下も宿泊されたことがある老舗旅館で、お部屋からは湖のように穏やかな七尾湾と、緑豊かな能登島が一望できます。確かに非常によいところではありますが、もちろんお値段もそれなりです。

実は、私は和倉温泉駅前が開業しており、たまたま加賀屋の産業医もしています(だからと言って値引きしてくれませんが…)。今回は現地幹事を務めることになり、本当にこんな遠くまで皆さんに来ていただけるのかとかなり心配でしたが、最終的には27名の方々(ご家族を含めると32名)にお越しいただきました。

懇親会では、岡本栄一君が作った卒業アルバムのフォトムービーが披露され、加賀屋さんのご厚意で差し入れていただいた親子芸人のショー(太神楽の傘回し等)を楽しみながら、七尾港で水揚げされた新鮮な魚介類を中心とした美味しいお料理をいただきました。七尾市は能登半島の真ん中にあり、穏やかな七尾湾と陸地の近くで急に深海になっている富山湾の両方に面していて、七尾港では多種多彩で新鮮な魚介類が水揚げされます。金沢のちょっとしたお寿司屋さんに入ると、「七尾港直送」の看板が掲示されていますよ。私の方から七尾に関するクイズ大会(クイズなるほど!ザNANA)でこの地域の紹介をさせていただきました。参加者一人一人からのスピーチでは、全国各地で臨床や研究のまさに最前線で活躍している同級生の様子に大きなパワーをいただきました。加賀屋内のパーティールームで二次会、幹事部屋で三次会と、あっという間に夜が更けました。

翌日は朝食後に、有志11名でマイクロバスを借りてミニツアーに出かけました。能登島水族館では全国で3ヶ所しかないジンベエザメの展示や、イルカ・アシカショー、ペンギンのお散歩などを堪能しました。能登島に棲む野生のイルカを追いかけている私の知人が経営している喫茶店「海とオルゴール」に立ち寄り、帰り道のバスから野生のイルカにもちょっとだけ出会えました。昼食は「すし王国能登七尾」の老舗の名店「信寿司」でいただきました。

改めて、クラス幹事の岡本栄一君と伊藤郁朗君には大変お世話になり、ありがとうございました。そして、遠くまで来ていただいた同級生の皆様から感謝して、再会を楽しみにしたいと思います。



昭和63年卒業医学部クラス会(平成30年7月15日 和倉温泉加賀屋)

昭和50年卒クラス会

石川 三衛 (昭50卒)

2年毎に開催されるクラス会、今回は9月1日高崎市のメトロポリタン高崎で開かれた。私たち50卒のクラス会は、幹事の群大名誉教授白倉君と伴野君の努力で定期的で開催されている。昨年は竹之下君の福島医大学長就任のお祝いを前橋で開いたので、ここ3年毎年顔を合わせる幸運が続いている。参加者は28名(参加者名は写真の脚注に記載)。初参加者は富山から草島君、前橋から杉田君、また夫人同伴は大塚君。世の中でいう定年年齢を過ぎてもみな元気一杯、大部分のクラスメートは第2、第3の職場で奮闘中と頼もしい。

高齢者年齢などどこ吹く風と、参加したクラスメートはそれぞれ現在の仕事、家庭など近況を紹介した。現役以上に頑張っている組織を牽引している者、これまで通りの仕事を継続する者、まだ当直もこなしている者、職場をかえて緩めに仕事をしながら余裕を楽しむ者、非常勤で週数日の外来をこなす者、仕事を卒業して初老の人生を楽しむ者など、多彩な話を聞いて時を忘れるひと時であった。家庭では子供たちが新たな家庭を持ち、改めて妻(夫)と二人で生きる環境となっている。かわいい孫の話を楽しそうにすれば、一方でまだ娘息子が結婚してないなどいろいろな修飾があるが、残りの人生を配偶者とともに手を携えながら……というところは確かだ。高齢者の気分に没する心は微塵もなく、まだまだこれからこのことを語る明るさがつよく印象に残ったクラス会であった。2年後の再会を約束して散会となった。



昭和50年卒業クラス会 (平成30年9月1日 高崎市 メトロポリタン高崎にて)

後列左より：白倉賢二、池村繁、矢野新太郎、野際英司、井上敏克、玉田潤平、草島義徳、宮永和夫
 中列左より：吉田寿春、相場利一、北島美信、田部井薫、水沼英樹、石川三衛、相澤徹、木村良一、村田繁
 前列左より：秋山典夫、星野和男、杉田裕、山内博正、大塚夫人、大塚良行、重成正枝、高橋育、伴野祥一
 枠外写真左より：真柄純子、竹之下誠一

クラス会だより

樋口 次男 (昭38卒)

昭和38年卒のクラス会が平成30年10月7日、例年通り尾形徹也君の世話役で新橋第一ホテルにて開かれました。(自称“花の三八会”として数年前より毎年開催しております。)音信不通のある中で、34名中17名(同伴者2名)とまずまずの出席数でした。

冒頭、本年8月に鬼籍に入られた中村茂君のご冥福をお祈りして、全員で黙祷をささげました。

引き続き近況報告となりましたが、今年で全員が80歳代になりましたので(最高齢者の塚越寛さんは94歳)仕事のこと以外話題の中心は専ら自身の健康

状態に終始しましたが、中には医師と言うよりは経営者としての能力を発揮して現存の施設に満足すること無く、将来に向けての病院拡張計画を披露する同輩もいて、その意気軒昂たるや羨ましかげりでした。

これに加えて人生100歳時代を迎えるにあたり“生きること”の意義についての話題提供がありましたが、これは自身に拘わる問題として、延いては患者さんの延命問題とどう向き合うかという大変難しい内容でもありました。

Deepな議論のあとのため多少感傷的になったのか、帰途につく際の駅前広場で足早に動く人の流れが何となく無機質に写り、素晴らしいクラス仲間にも恵まれた幸せと感謝の気持ちを改めて感じることができました。



昭和38年卒クラス会(平成30年10月7日 新橋第一ホテル)
後列左より:尾形、樋口、折口、遠藤、石井、境野、鈴木令夫人
前列左より:伏谷、松崎、塚越、鈴木、安部、上地、竹内、鷹野

寄稿

国立国際医療研究センター狩野繁之部長
タイ王立マヒドン大学名誉博士号受賞群馬大学顧問・名誉教授
鈴木 守 (特別会員)

国立研究開発法人国立国際医療研究センター研究所・熱帯医学・マラリア研究部の狩野繁之部長(本学昭和61年卒業)はタイ王立マヒドン大学名誉博士号(熱帯医学)をシリントン王女より直接授与される栄誉に輝き9月20日の授与式に臨席致しました。熱帯医学分野でマヒドン大学名誉博士号を授与された日本人は故橋本龍太郎元総理大臣のみであり同窓会の慶事でもありますのでご紹介させていただきます。

狩野繁之君は群馬大学医学部を卒業後医学部寄生虫学教室で研究を開始し学位取得後同教室の助手、講師、助教授をつとめました。平成10年国立国際医療センター研究所の竹田美文所長の強い要請により同研究所の研究部長に就任致しました。爾来日本の熱帯医学研究活動の中心部にあって本邦の熱帯医学特にマラリア研究の推進者としての役割を果たして今日に及びました。

群馬大学在任中の狩野君の仕事は「実験室内の成果とフィールド研究を連動させる」という寄生虫学の理念を地で行くことにつきると思います。群馬大学寄生虫学教室にはしばしば熱帯諸国へ出張して帰国後高熱を発し緊急を要する患者さんについてのコンサルテーションが求められました。知らせを受けると狩野君は直ちに病人のもとに駆けつけて主治医と共に診断・治療に当たりました。脳マラリア、腎不全など重症化した熱帯熱マラリアの症例について当時中国で開発されたばかりの artemether (2015年ノーベル



シリントン王女より直接タイ王立マヒドン大学名誉博士号授与

生理学・医学賞)を果敢に使用し患者さんの命を救ったことも何度かありました。このような臨床経験を通じて急性期の熱帯熱マラリア罹患において血液内に特別の物質が出現することを突き止め、それがマラリア原虫に由来するエノラーゼであることを解明しました。スーダンのフィールド研究においてマラリア流行地の住民が流行期においてエノラーゼに対する抗体が上昇することからマラリア原虫のエノラーゼがワクチン候補となる可能性があることが予想されました。工学部の片貝研究室の奥浩之准教授と共同研究を展開しエノラーゼの活性中心部である AD22 の合成にこぎ着けました。こうして得られた AD22 は有望なマラリアワクチン物質である実験結果もえられたので今後の展開が期待できます。

寄生虫学教室にはさまざまな国から留学生がやってきて共に勉強をすすめましたが、留学期間が終わって帰国後も密接な連携を維持している事例もいくつかあります。フィリピン大学公衆衛生学部のピラリタ・リベラ教授との共同体制はパラワン島の住民参加型のマラリア対策の構築という結果を生みマラリア制圧の驚異的な成功例となりました。26年前に群馬大学は日米医学協力研究寄生虫疾患部門の会議を主催しましたが、その時前橋に来たマヒドン大学のソンチャイ教授と狩野君との連携はその後長く継続し狩野君はマヒドン大学熱帯医学部の Visiting Professor をつとめ大学院生の指導にあたりました。さらに現在狩野君は日本政府の進めるラオスのパスツール研究所との共同研究事業のプロジェクト長に任命され、Paul T. Brey 所長とともに事業の推進にあたり国際的な注目を集めています。

タイの熱帯医学研究は世界の熱帯医学研究の中心部に位置して参りました。特に1960年にハリナスタ教授夫妻によってクロロキン耐性熱帯熱マラリアの発生と拡散が立証されたことはその後の世界のマラリア対策を根本から変えることになり WHO、米国 NIH、英国熱帯医学会などが挙って賞賛した研究成果として歴史的な意味をもっています。爾来タイのマヒドン大学、チュラロンコン大学は世界の熱帯医学の中心に位置づけられて今日に至りました。この度の狩野君の名誉博士号受賞は同君の東南アジア諸国、また日本の熱帯医学・寄生虫学・マラリア学分野における貢献が世界的に評価された結果といえるでしょう。

熱帯医学の推進には先進国政府、ビル・ゲイツ財団など大きな資本力が投入される時代を迎えました。こうした時代の指導者には実験室内の成果をあげると共に優れた協調能力が要求されます。狩野繁之部長は今その力を存分に発揮できる時を迎えました。刀城クラブ同窓生の皆様の応援をお願いして祝辞とします。

財 団 の ペ ー ジ

公益財団法人群馬健康医学振興会 の事業に一層のご理解を

公益財団法人 群馬健康医学振興会
理事長 鈴木 忠 (昭45卒)



同窓会刀城クラブの皆様方の当財団に対するご理解とご支援・ご協力に感謝申し上げます。当財団は多くの刀城クラブ会員のご理解ご協力を頂いておりますが、一方、「公益財団法人群馬健康医学振興会」って何？同窓会のこと？等の質問をうけることが少なからずあります。確かに当財団は、誕生から現在に至るまで同窓会と密に連携して歩みを進めてきましたので同窓会の一事業と混同されがちですが、独立した別組織で、同窓会刀城クラブ会員のための事業を展開しているわけではありません。当財団は広く県民の健康増進のために公益的事業を推進する目的で設立され、事業を展開しています。当財団は

群馬県内の保健・医療・福祉の分野に携わっている方々を対象とした健康づくりのための研究助成、県民の健康知識向上のための講演会・講習会に対する講師派遣と「健康医学ガイドシリーズ」の書籍発行等の公益目的3事業を展開しています。公益財団法人認定を機に学会開催等に対する助成も開始しており、これまで医学部医学科教授が学会長を務める学会等に止まっていましたが、今年度は学外と同窓生（清水敬親先生昭57卒）が学会長を務める学会開催の助成も予定しております。また、平成31年度研究助成金の募集と海外留学助成金の募集を開始しました。刀城クラブ会員はもとより広く関係施設職員の応募を期待しております。詳細は財団ホームページをご参照ください。これまでの事業の内容と実績は財団の紹介リーフレットおよび財団ホームページに紹介しておりますので是非ご参照ください。

今後とも地域に根ざした事業を展開いたしますので、同窓会刀城クラブの皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

【平成31年度公益財団法人群馬健康医学振興会研究助成金及び海外留学助成金募集中】

1. 募集期間は平成30年10月1日から平成31年2月末日まで
2. 応募資格、応募方法等は当財団事務局にお問合せ又は当財団ホームページをご覧ください。

公益財団法人群馬健康医学振興会 事務局

住 所：371-8511 群馬県前橋市昭和町三丁目39-22 群馬大学医学部刀城会館内

Tel：027-220-7873 Fax：027-235-1470 E-mail：gfmhs-jimu@ml.gunma-u.ac.jp

URL：http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/zaidan/index.html

群馬健康医学振興会 御加入のお願い

公益財団法人 群馬健康医学振興会
常務理事(財務担当)

大島 茂 (昭53卒)



県民の健康増進を目的として設立された公益財団法人群馬健康医学振興会は、昭和54年の設立以来群馬県の保健、医療、福祉に貢献すべく事業を展開してきました。主な事業としては①医学研究、教育や学会・研修会等に対する研究助成事業、②書籍発刊事業、③講師派遣事業など3項目の公益目的事業、収益事業として医師賠償責任保険の委託契約集金事務があります。

このうち書籍発刊事業としては最新の医学について広く知っていただくため、概ね5年ごとに「健康医学ガイドシリーズ」を発刊しています。研究助成としては平成30年度は6件の研究に対する研究費助成が採択されました。学会・講習会等の開催に対しては、10th Annual

Meeting of Cervical Spine Research Society- Asia Pacific Section (会長 清水敬親様名荘病院脊椎脊髄病センター長)、第8回手術基本手技講習会(主催者調憲群馬大学総合外科学教授)への助成を予定しています。このほか、平成30年度に応募者はありませんでしたが、海外留学への支援も行っています。

当財団は会員の会費、寄付金、および委託契約集金事務費などを運営資金にしてこうした公益的事業を推進していますが、今後の発展のためには財団について広く知っていただくこと、および賛助会員数を増やすことが不可欠です。皆様方におかれましては当財団の活動についてご理解いただき、是非とも賛助会員に加わっていただきますようお願いいたします。なお、会費や寄付金は個人の場合税制上の優遇措置を受けることができます。

公益財団法人群馬健康医学振興会は皆様のご理解のもと地域への貢献を進めていく所存であり、皆様自身の研究活動や後進の指導にもお役に立てるものと考えています。皆様のご支援を今後とも宜しくお願い致します。

財団のページ(平成27年度研究助成報告書)

研究テーマ『地域の通所リハビリテーション(デイケア)における内部障害患者の割合とリスク管理について』

高崎健康福祉大学保健医療学部
理学療法学科 千木良佑介



【報告書】高齢者におけるリハビリテーション中アクシデントのリスク管理を目的として、デイケア利用者の診断名や服薬状況などから内部障害保有率を抽出するとともに年間アクシデント発生を調査した。デイケア利用者における内部障害の保有数は心疾患30名(32.6%)、呼吸器疾患3名(3.3%)腎疾患8名(8.7%)、膀胱・直腸障害5名(5.4%)であった。年間で発生したアクシデントは頰脈3件、徐脈1件、SPO2低下・呼吸困難3件、血圧変化3件(低下2件、上昇1件)、心不全症状2件であった。またその対処として、心電図モニターにて確認した例3件、外来受診にて対応した例4件であった。デイケアにおいて、内部障害の保有率は高く、心疾患、腎疾患の順で多かった。実際に発生したアクシデントの原因として、内部障害に対するアセスメント不足が挙げられる。介護施設に勤務する理学療法士は内部障害のリスク管理を徹底する必要がある(掲載論文:理学療法群馬 2016; 27: 36-39)。

研究テーマ『脳脊髄液漏出症における脳槽シンチ検査による患者負担が低い精度の高い診断法の確立』

前橋赤十字病院 星野 洋満



【報告書】従来の脳槽シンチ検査法は、検査機器上で脳槽内にRIを注入し、直後、1時間後、3時間後、6時間後及び24時間後の撮影が必要であり、画像収集時間は、合計約70分を必要としました。しかし脳槽シンチグラフィの検査手技と評価方法を厳密に標準化する事により、3時間後の画像から注入直後の全カウント及び3時間後の膀胱集積率を評価する事が可能となり、医原性漏出を定量評価する事が可能となりました。RIクリアランス測定は24時間後の頭部のみを撮影する事で、正確に定量評価が可能となり、側湾症の患者にも対応可能となりました。これにより、RI注射を処置室で行う事が可能となり、さらに直後、1時間後、6時間後の撮影が不要になり、検査時間短縮と検査枠の有効利用が可能となるプロトコルの作成に成功しました。この成果はAnnals of Nuclear Medicine に掲載されました。(Hoshino H, Higuchi T, Achmad A, et al. A new approach for simple radioisotope cisternography examination in cerebrospinal fluid leakage detection. Ann Nucl Med. 2016; 30(1): 40-48)。

研究テーマ『胃癌術後患者における栄養状態の評価-術式間での脂溶性ビタミンの血中濃度に着目して-』

群馬大学医学部附属病院
消化器外科 豊増 嘉高(平15卒)



【報告書】腹腔鏡下幽門側胃切除術(LDG)は低侵襲外科手術として広く普及している。LDG後の再建にはBillroth-I法(B-I)とRoux-en-Y法(R-Y)が行われるが、両者における術後患者の生理学的機能の差異を研究した。方法:LDG術後のB-I再建群とR-Y再建群において、血中ヘモグロビン、フェリチン、血清鉄、ビタミンB12、ビタミンD、体重、胃内容排泄など比較した。結果:B-I再建群では術後のヘモグロビン濃度、フェリチン値、ビタミンDがR-Y再建群より高いことが判明した。また、R-Y再建群の胃内容排泄はB-I再建群より遅延していた。考察と結論:R-Y再建と比較してB-I再建の方が術後性鉄欠乏症貧血やV-D欠乏症の発症を抑制できることが示された。さらに、胃内容排泄時間もR-Y再建と比較してB-I再建において短縮していた。以上より、LDG後のB-I再建はR-Y再建より栄養的合併症の発生を起す可能性が低いと結論された(掲載論文:Toyomasu Y, Ogata K, Suzuki M, et al. Comparison of the physiological effect of Billroth-I and Roux-en-Y reconstruction following laparoscopic distal gastrectomy. Surg Laparosc Endosc Percutan Tech. 2018; 28(5): 328-333)。

研究テーマ『高齢者交通安全向上プロジェクト事業』

NPO 群大クラブ 阿部 尚子



【報告書】高齢者の交通事故は増加傾向にあり、その背景には老化による体力や判断力の低下など、高齢者に特有の事情があると推測される。そこで本研究では高齢者の体力向上と交通安全対策との関係を検証した。被験者6名(平均年齢78.2歳)に対して定期的運動プログラムを8ヶ月間実施し、その前後において文部科学省新体力テスト、血液生化学的検査、質問紙による生活習慣、自動車教習所での運転適性検査を行って評価した。その結果、(1)継続的な有酸素運動により赤血球酸素運搬能が増加した、(2)継続的な運動により体力の維持向上効果があった、(3)体力評価が高いものは運転適性検査結果が高得点であった、との成果が得られた。これより体力向上プログラムが高齢者に対する交通安全対策として一定の効果を発揮することが明らかになった。

役員会だより

第7回役員会 (平成30年7月26日)

出席者 飯野会長 他20名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 刀城クラブ前橋支部総会・講演会・懇親会について
3. その他

協議事項

1. 平成29年度収支決算書(案)について
2. 平成30年度事業計画(案)について
3. 同窓会・刀城クラブ会長の推薦について
 - 2) 同窓会・刀城クラブ役員人事について
4. 平成29年度地域医療貢献賞候補者の推薦について
5. 会報編集状況について
6. その他
 - 1) 故 矢島祥子先生(平11卒)の事件について
 - 2) その他

第8回役員会 (平成30年9月27日)

出席者 飯野会長 他21名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 同窓会総会と教授の会について
3. 渋川支部総会について
4. その他

協議事項

1. 学術集会補助金について
2. 会報編集状況について
3. その他
 - 1) 飯野会長挨拶について
 - 2) その他

第9回役員会 (平成30年10月25日)

出席者 白倉会長 他20名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 同窓会総会及び教授の会について
3. 学友会及び運動部・文化部役員交代について
4. その他
 - 1) 故 矢島祥子先生(平11卒)の事件について
 - 2) その他

協議事項

1. 役員改選に伴う各種委員会委員について
2. 学術集会補助金について
3. 学生交換交流プログラム学生受入の補助について
4. 会報編集状況について
5. その他

学内人事

【昇任】平成30年10月1日

- 登坂 雅彦(平5卒) 大学院医学系研究科脳神経外科学分野准教授
- 前野 敏孝(平5卒) 大学院医学系研究科呼吸器・アレルギー内科学分野准教授
- 柳川 天志(平7卒) 大学院医学系研究科整形外科学分野准教授

- 河村 英将(平15卒) 大学院医学系研究科腫瘍放射線学分野准教授
- 関根 芳岳(平12卒) 大学院医学系研究科泌尿器科学分野講師
- 矢島 俊樹(平9卒) 医学部附属病院呼吸器外科講師
- 山田英二郎(平11卒) 医学部附属病院内分泌糖尿病学内科講師

学外人事

【昇任】平成30年10月1日

- 青山 朋樹(平6卒) 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻リハビリテーション科学コース理学療法学講座運動機能開発学分野教授

謹告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

- 昭和30年卒 川邊宗次郎先生(平成30年7月29日逝去)
- 昭和35年卒 松峯 敬夫先生(平成30年8月2日逝去)
- 昭和41年卒 佐藤 俣也先生(平成30年8月3日逝去)
- 昭和38年卒 中村 茂先生(平成30年8月9日逝去)
- 昭和57年卒 稲葉 繁樹先生(平成30年8月9日逝去)
- 昭和35年卒 宮原 康員先生(平成30年8月10日逝去)
- 昭和25年卒 北島 光二先生(平成30年8月26日逝去)
- 昭和33年卒 片貝 重之先生(平成30年9月8日逝去)

特別会員

- 高山 武先生(平成30年8月3日逝去)

編集後記

今年の夏は記録的な猛暑日が続く日々でした。その影響で今年は冬の訪れが遅く、師走になっても、昭和キャンパスのメインストリートはあたかも外苑の銀杏杏並木のような見事な黄葉をたたえ、臨床講堂前の大きな櫟にはまだ紅葉が残っています。ところで本会報の編集は、昨年10月から大山良雄先生を編集責任者とする新体制で行っています。大山良雄先生は平成22年から会報編集に携わっているベテランであり、7名に増員された学生委員とともに、同窓の皆様に楽しみにして頂ける会報をお届けできるよう、和気藹々とした雰囲気の中で企画、レイアウト、数回に亘る校正作業を繰り返し行っています。これからも皆様の変わらぬご支援をお願いいたします。(福田 利夫)

編集委員

福田利夫(昭51卒)、平戸政史(昭53卒)、藤田欣一(昭56卒)、安部由美子(昭57卒)、大山良雄(昭63卒)、菊地麻美(平7卒)、星野綾美(平13卒)、稲葉美夏(6年)、正古慧子(6年)、吉濱れい(6年)、高橋慶一郎(5年)、板垣由宇也(4年)、大玉浩嗣(3年)、佐藤聖佳(3年)、成瀬豊(事務局)、清水ちとせ(事務局)